

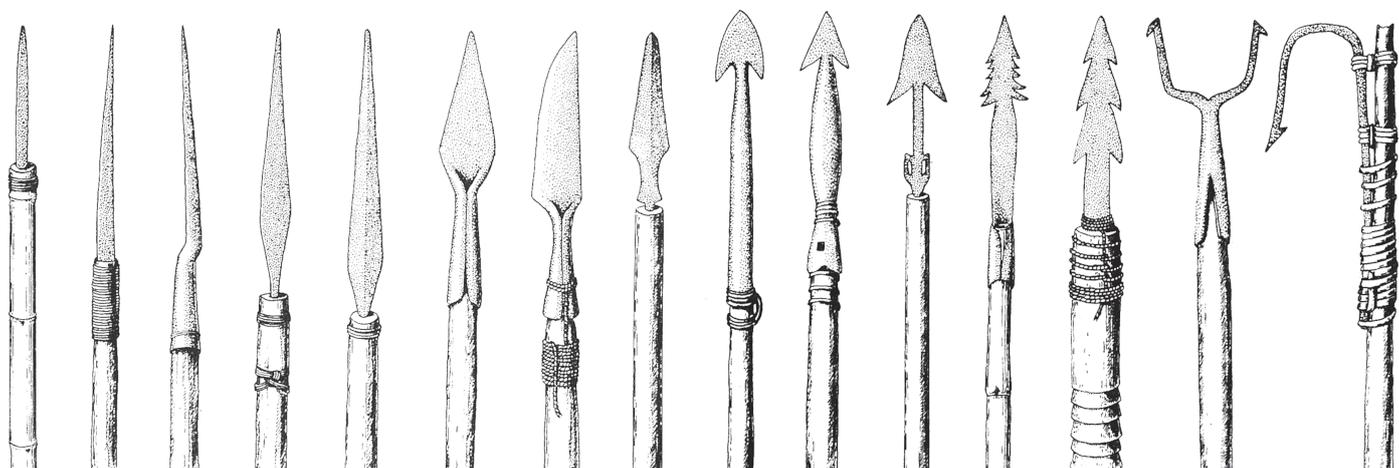
パレオアジア

—アジア新人文化形成プロセスの総合的研究—

文化史学

Cultural History of PaleoAsia

計画研究 B01 班 2016 年度 研究報告



人類集団の拡散と定着にともなう

文化・行動変化の文化人類学的モデル構築

野林 厚志 編

表紙、裏表紙

台湾原住諸民族の狩猟具と武器。

出典

Chen, C. 1988 [1968] *Material Culutre of the Formosan Aborigines*. Taipei:
Southern Materials Center, Inc.

はじめに

2016年7月より、文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究「パレオアジア文化史学——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究」が、5年計画で開始された。本書は、領域を構成する計画研究班の中のB01班「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」の2016年度研究報告書である。

新人（ホモ・サピエンス）は、10～5万年前頃以降、ユーラシア各地へと拡散し、先住者たる旧人たちと「交替」した、もしくは、旧人たちが居住できなかった場所へその居住域を拡大していった。また、各地に拡散した新人の中には、先住者である旧人と交雑した可能性も盛んに議論されている。

こうした生物学的な意味での変化と並行して、文化的な変化も進むというのがこれまでの一般的な考え方であった。すなわち、新人には新人固有の、旧人には旧人固有の文化が普遍的に存在するということである。しかしながら、近年、「新人的行動」の一部が旧人に伴う事例や、逆に新人が「新人的行動」をしていない事例が明らかになってきた。とりわけ、西アジアよりも東側の広大なユーラシア地域では、多様な自然環境が人類集団の行動に少なからず影響を与えていたことが想定されており、従来とは異なる新人文化探究への取り組みが求められている。

新人が拡散し旧人と接触した、もしくは初めて到来した土地に定着していったのは数万年前のできごとであり、過去の事実を調査、検証するのは考古学、古環境学からのアプローチに委ねることになる。一方で、過去の事実がなぜ生じたのかは、体系的に収集、解析された人類行動を示す考古記録や、復元された古環境から推論せざるを得ない。こうした推論を行うための材料、モデルを文化人類学的アプローチにもとづき提供するのが、計画研究B01班の主要な役割となる。

従前の役割を果たすために、B01班では、人間の行動の中でも、生業活動、生産活動、象徴化、社会関係等に焦点をあて、物質の変化から社会の変化を読み解くための方法論的モデル、具体的な事象の積み上げを目指してみたい。アジア諸地域において、継承、製作、使用、流通してきた事物が、変化する過程をフィールド調査、国立民族学博物館や国内外の博物館等に収蔵されてきた歴史資料の熟覧調査、史料調査を通して明らかにする、さらに、ものの形態や形状、道具等も含めた製作手法、材質、使用の脈絡、価値や象徴性、代替、欠失等の変化の具体的な様相を記述的に分析し、ものの属性の変化とその要因、変化がさらに個人の行動や集団の価値観を変化させる原理を探究していきたいと考えている。

2016年度は、領域全体の目的、B01班と同様に文化変化の理論を担当するB02班との協働の方向性を探りながら、先に述べた4つの主要な課題に取り組むための予備調査を行うとともに、パレオアジアというマクロな規模での文化変化の理論を考えるための通文化的な研究の方向性を議論した。それらについての報告を行う。

計画研究B01班代表

野林厚志

国立民族学博物館・教授

研究組織

研究代表者

野林 厚志 国立民族学博物館 文化資源研究センター・教授

研究分担者

池谷 和信 国立民族学博物館 民族文化研究部・教授
上羽 陽子 国立民族学博物館 文化資源研究センター・准教授
藤本 透子 国立民族学博物館 民族文化研究部・准教授
山中由里子 国立民族学博物館 民族文化研究部・准教授

連携研究者

卯田 宗平 国立民族学博物館 先端人類科学研究部・准教授
大西 秀之 同志社女子大学 現代社会学部・教授
金谷 美和 国立民族学博物館 民族社会研究部・外来研究員
菊田 悠 北海道大学 スラブ・ユーラシア研究センター・助教
中谷 文美 岡山大学大学院 社会文化科学研究科・教授
丸川 雄三 国立民族学博物館 先端人類科学研究部・准教授
吉田世津子 四国学院大学 社会学部・教授

研究協力者

戸田美佳子 国立民族学博物館 文化資源研究センター・機関研究員
彭 宇潔 国立民族学博物館・プロジェクト研究員

目次

はじめに

計画研究 B01 班のねらい	野 林 厚 志	1
狩猟採集民と隣人との相互関係の動態	池 谷 和 信	5
「線具 lineware」——紐と糸をめぐる技術民族誌的研究.....	上 羽 陽 子 金 谷 美 和 中 谷 文 美	10
生業技術の内在的な展開		
中国・大興安嶺森林地帯におけるトナカイ飼育技術の事例報告	卯 田 宗 平	16
生態資源獲得の道具と技巧の人類学的研究にむけて	野 林 厚 志	20
集団間の接触にともなう居住形態の変化		
——中央アジアのカザフスタンの事例を中心に	藤 本 透 子	25
想像界の生物相		
——生態系と人間の想像力の相関関係の比較文化的研究	山 中 由 里 子	31
〈調査概報〉 オーストラリア大陸への現生人類の移動と適応		
——現地調査報告概報——	大 西 秀 之	35
2016 年度の計画研究 B01 班全体での研究活動		41

計画研究 B01 班のねらい

野 林 厚 志

(国立民族学博物館)

1. 文化人類学の物質文化研究

文化人類学、民族学における物質文化研究は「未開社会」の「もの」に対する博物学的関心にはじまり、贈与論等に代表される個別のものの社会的機能、集団間の類似性や歴史的構成を推論する指標としての物質文化、環境への文化的適応手段、「原始美術」批判論争等が主たる課題とされてきた。

近年ではものと人間との相互作用を中心に議論が鍛えられている。作り手の意図がもの（作品）に置き換わることに着目し、事物の社会的関係と事物を結節点とする人間同士の社会的関係を探るエージェンシー論 (Gell 1998)、人間の内的意図による合理的な行動とそれに対する受動的なものという近代的二分法の関係からの脱却をねらうアクター・ネットワーク論 (Latour 2009)、人間の世界への関わりかたを認知的、物理的、身体的な側面で同時にとらえるエンゲージメント論 (Renfrew 2005)、物性、感覚性、存在論の問題系を視野にいれる物質性の議論 (古谷 2010) やものを本体、表面、媒体の間の相互作用の過程としてとらえる境界論 (Ingold 2007) に代表されるマテリアリティ論等のように、多様な議論が展開されてきた。

最近、とりまとめられた『オックスフォード物質文化ハンドブック』(Hicks & Beaudry 2010) では、ものの構成要素 (材料、起源、組み合わせ等)、ものの生産技法やシステム、交換、消費の様式、主体 (人間) が所有する観念や意図ともものが関わる様式、逆に無意識的な部分ともものが関わる様式、価値体系、宇宙観、信念、感情、個人や集団のアイデンティティともものが関係する様態、ものが担う集団的記憶、空間、場所、概念に関する情報媒体としてのものの機能、ものと身体性等の広範な観点が示され、ものの研究から人間の社会を探究する可能性の広がり、かつての物質文化研究の枠組ではとらえることのできない段階にある。

こうした研究のひろがり、一部の考古学者にも少なからず影響を与えている。資料の分析精度が向上した現

代の考古学においても、伝統的研究である生態学的適応だけでなく、社会的、文化的問題をより深く議論することが可能になってきたからである。例えば、西アジアにおける家畜化の起源を、生態資源の安定供給が目的とされたためというだけでなく、特定の時期にまとまった量の食肉が必要になったことよるとして提出された饗宴説 (Twiss 2008) などは、動物利用という点から過去の社会的側面に研究の力点をおいた例と言える。

2. 領域の課題との接点

「新たなヒト集団が拡散したはずなのに、なぜ、文化が変化しない地域があるのか。」という領域が設定する根本的な課題が生じた理由に、次の3つの可能性を考えてみたい。

- (1) 集団の「接触」によるイノベーション (文化の変化) があったが、その痕跡が見えない。これはさらに2つの結果に分かれる。1) イノベーションがあった集団の痕跡が見つかっていない。2) 集団の痕跡はあるが、イノベーションが可視化されない (現代では認識できない)
- (2) 集団の「接触」によるイノベーション (文化の変化) が定着しなかった。
- (3) 集団の「接触」によるイノベーション (文化の変化) が存在しなかった。この背景には文化的には同質であったことが考えられる。

(1) は考古学的な発見、タフオノミー、方法論上の限界が大きくものをいう。一方で、(2) と (3) は、現代にも同様な現象が生じることから、文化人類学における問題に外挿できるであろう。もちろん、文化人類学は現代もしくは近い過去に生じた現象を扱っているということ、また、基本的には新人に生じている現象を扱っていることになるため、観察した事実を一般化できたとしても、それらは新人の集団同士の接触とその結果で生じた現象にすぎず、パレオアジアの主要な課題である新人と旧人との接触の問題に、直接、当てはめることはできない。

そこで、新人、旧人の違いに関する諸条件をパラメータ化して、文化の変化について議論できる数理モデル研究との協働が必要になる。

文化人類学では新人と旧人との違いを規定したり、想定したりすることは不可能である。一方で、文化の要素を抽出しその変化を記述したり、場合によっては定量化することは可能である。例えば、文化変化の大きな要因となるイノベーションについては、社会に発生したイノベーションの量を、液体の重さや体積のような間隔尺度で単純に表現することはできないが、イノベーションを定着させた集落（社会）の数の多寡のように順序尺度くらいまではとらえることは十分に可能である。

イノベーションの定着についての古典的な現象モデルは、Rogers (2007) に詳しい。イノベーションの伝播において想定されうる行動学的な原理は、次のような一般的記述がなされている。

1) 個人の革新性は伝統的志向よりも近代的志向と関係がある。2) 個人の革新性は革新性に関する社会体系の規範によって直接的に変化する。3) 相対的により後期の採用者はより早期の採用者にくらべて、イノベーションを中絶する傾向が強い。4) インパーソナルな情報源は採用過程の認知段階で、もっとも重要である。そしてパーソナルな情報源は評価段階でもっとも重要である。5) 広域志向的な情報源は認知段階でもっとも重要であり、地域志向的な情報源は評価段階でもっとも重要である。6) イノベーションに関する知識の欠落が、実際にその採用を遅らせる、という事実を証明するデータはわずかしかない。7) 認知は採用にくらべてより急速な増加率を示す。8) イノベーションを最初に採用する人びとの採用期間は、相対的により後期の採用者にくらべて、短期間である。9) 認知－試行期間は試行－採用期間よりも長い。10) 認知－試行期間は相対的により後期の採用者にくらべて、より早期の採用者のほうが短い。11) 試行－採用期間は相対的により後期の採用者にくらべて、より早期の採用者のほうが長い。12) より早期の採用者はより後期の採用者にくらべて、イノベーションを小規模に試みる。13) 危機はイノベーションの相対的な利点をきわだたせ、その採用率に影響をあたえる。14) 社会体系のメンバーによって知覚された新しいアイデアの相対的な利点は、その採用率に影響を与える。15) 社会体系のメンバーによって知覚された新しいアイデアの適合性は、その採用率に影響を与える。16) 社会体系のメンバーによって知覚されたイノベーションの複雑性は、その採用率に影響を与える。17) 社会体系のメンバーによって知覚されたイノベーションの可分性は、その採用率に影響を与える。18) 相対的により早期の採用者はより後期の採

用者よりも、可分性をより重要なものとして知覚する。19) 社会体系のメンバーによって知覚されたイノベーションのコミュニケーション可能性は、その採用率に影響を与える。20) 採用者分布は時間の経過につれてカネ型曲線を取り、正規性に近づく。21) より早期の採用者はより後期の採用者よりも、年齢が若い。22) より早期の採用者はより後期の採用者よりも、社会的地位が高い。23) より早期の採用者はより後期の採用者にくらべて、より富裕な財政状態にある。24) より早期の採用者はより後期の採用者よりも、より専門的な経営を行なう。25) より早期の採用者はより後期の採用者とは違ったタイプの知的能力をもっている。26) インパーソナルな情報源は、イノベーションのより後期の採用者にくらべて、相対的により早期の採用者にとって、パーソナルな情報源よりも重要である。27) 広域志向的な情報源は、イノベーションのより後期の採用者よりも、相対的により早期の採用者にとって、地域志向的な情報源よりも重要である。28) より早期の採用者はより後期の採用者にくらべて、新しいアイデアの原点とより煩雑な接触を保っている情報源を利用する。29) より早期の採用者はより後期の採用者にくらべて、非常に多数の情報源を利用する。30) より早期の採用者はより後期の採用者にくらべて、より広域志向である。31) より早期の採用者はより後期の採用者にくらべて、より多くのオピニオン・リーダーシップを発揮する。32) 社会体系における個人は、時間の経過につれてあるカテゴリーから他のカテゴリーに、かなり移動する。33) 遅滞者は社会体系から脱落する傾向がもっとも大である。34) 革新者は社会体系の他のメンバーによって、逸脱者として知覚される。35) 革新者は自分自身を、社会体系の規範からの逸脱者として知覚している。36) 仲間のパーソナル・インフルエンスは、採用過程の評価段階でもっとも重要であり、他の段階では評価段階にくらべてその重要度は低下する。37) 仲間のパーソナル・インフルエンスは、相対的により早期の採用者にくらべてより後期の採用者にとって、より重要である。38) 仲間のパーソナル・インフルエンスは、明確な状況のもとでもよりも、ふたしかな状況のもとでのほうが重要度が高い。39) オピニオン・リーダーは平均的のメンバーにくらべて、社会体系の規範により忠実に同調する。40) さまざまな違ったタイプのオピニオン・リーダー相互間には、あまり重複がみられない。41) オピニオン・リーダーはフォロワーにくらべて、よりインパーソナルな、より技術的に正確な、そしてより広域志向的な情報源を使用する。42) オピニオン・リーダーはフォロワーにくらべて、より広域志向的である。43) オピニオン・リーダーはフォロワーにくらべて、社会的参加の度

合いが高い。44) オピニオン・リーダーはフォロワーにくらべて、社会的地位が高い。45) オピニオン・リーダーはフォロワーにくらべて、より革新的である。46) 各採用者カテゴリーは主として、同一あるいはより革新的な隣接カテゴリーの個人によって、影響を受ける。47) 革新性についての社会的体系の規範は、少なくともある程度までオピニオン・リーダーの革新性を決定するようである。48) 諸個人間の革新性の差は、伝統的規範の社会体系の場合よりも近代的規範の社会体系において、アイデアの流れにたいしてより重要な障害となる。49) 普及促進者による促進勢力の度合いは、イノベーションの採用率と直接的な関係がある。50) 商業的な普及促進者は、採用過程の他のどの段階よりも試行段階でより重要である。51) 商業的な普及促進者は試行段階で、より後期の採用者よりもより早期の採用者にとって、より重要である。52) 普及促進者は社会全体において、地位の低いメンバーよりも高い地位のメンバーと、より多くのコミュニケーションを行なう。

これらのイノベーションの原理を注意深く読み解く際、我々はある重要な点に気がつくことになる。それは、イノベーションが生じる要因と定着する条件とは必ずしも一致しないということである。端的に言えば、イノベーションの発生には環境要因が重要となるが、それが定着するかいなかは、イノベーションを扱う社会のありように大きく影響されていく。

パレオアジアの環境空間で考えるならば、自然環境に適応した術が人間側に生まれたのが先か、術を定着させていく社会が先に形成されており、適応のための術がそうした社会に発生したからこそイノベーションの定着が可能となり、文化の変化が生じながら集団として生存、拡散していったのかは、一つの論点となるように思われる。換言すれば、それ相応の社会が生まれていないところに、イノベーションがいくらはいりこんだとしても、それが継承されていくことは期待できないということである。

計画研究 B01 班において、「我々意識」を有する地域・民族集団を調査、分析の基本的な対象とし、「集団」の接触によってものが変化する原理を考えようとするのはこうした理由による。意識的にも無意識的にも、あるものに物理的にアクセス可能な状況にある「集団」で継承、製作、使用、流通または無意識下で存在してきたものが変化する過程をフィールド調査、国内外の博物館等に収蔵されてきた歴史資料の熟覧調査と比較分析、文献史料調査を通して明らかにしようというものである。

フィールド調査や博物館資料の調査では、ものの形態や形状、道具等も含めた製作手法、材質、使用の脈絡(い

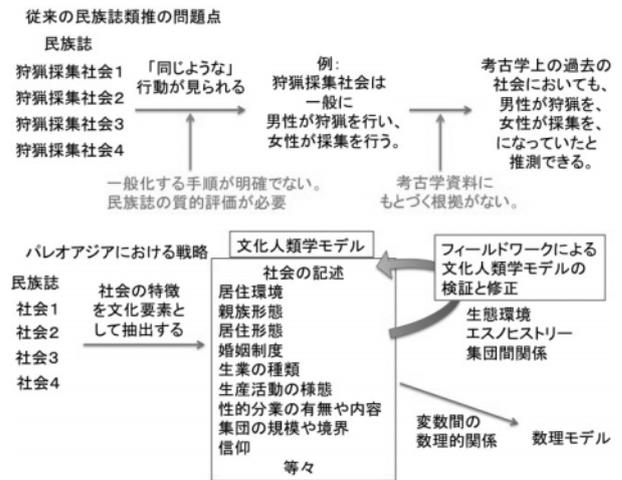


図1. 本計画研究班における研究の組み立て

つ、どこで、誰が、何故、どのように)、ものが集団内で有する価値、象徴性、表象、代替、欠失等における変化の具体像を基本データとして収集し、記述的に分析するという基本的な部分を重視する。一方で、これまでに蓄積されてきた民族誌を見直し、文化の変化と人間の社会との関係に関わるデータを抽出し、通文化的な分析のためのデータセットの構築も進めていくことになるであろう。

分析の視点には、1) 外部「集団」との接触による変化には、2) 集団内での自律的、偶発的変化も加えられるであろう。ものの属性が変化する動態とその要因、さらに変化が個人の行動や集団の価値観を変化させる原理、すなわち、ものと人間社会との変化の往還を探究することが求められるのである。

ただし、すべての要素を網羅的に調査、研究することは領域の限られた研究期間では不可能であることから、パレオアジアの社会動態の解明にむけて、考古学における主要な課題である、1) 生業活動、2) 生産活動、3) 象徴化、さらに社会動態の解明に深く関わる、4) 社会関係に焦点をあてていくことにしたい。

3. まとめ

人類集団の拡散や定着、他集団との接触とそれとともなう生じる現象は、従来、文化人類学と考古学とで個別に議論されてきた。本領域では現代と過去のものの変化を相互参照することにより、ものと社会との関係を時間と場所のサイズに限定されない鳥瞰的な視点で探究するという特色がある。考古学と文化人類学のこうした協働は地域的に限定された対象に留まることが多い。パレオアジアという地理的にも時代的にもかつてないスケール

ルでこうした問題に、文化人類学ならびにその関連分野の研究者が関われる機会はそれほどないであろう。文化を記述することに対し萎縮し、政治学や経済学で扱われるグローバルな課題や社会理論のマイクロ化を拠り所としているようなきらいもある現状において、人間の社会とはなにか、そして、人間とはなにかという問題を学際的に考える絶好の機会が得られたと考えている。

参考文献

- Gell, A.
1998 *Art and Agency: An Anthropological Theory*. Oxford: Oxford Univ. Press.
- Hicks, D. & M. Beaudry (eds.)
2010 *The Oxford Handbook of Material Culture*, Oxford: Oxford Univ. Press.
- Latour, B.
2009 Where are the Missing Masses? The Sociology of a Few Mundane Artifacts. In Candlin, F. & Guins, R. (eds) *The Object Reader*. pp.229-254. London: Routledge.
- Miller, D. (ed.)
1995 *Acknowledging Consumption: A Review of New Studies*, London: Routledge.
- Rogers, E.
2007 『イノベーションの普及 (第5版)』 (三藤俊雄訳) 東京: 翔泳社
- Twiss, K.
2008 'Transformations in an Early Agricultural Society: Feasting in the Southern Levantine Pre-Pottery Neolithic.' *Journal of Anthropological Archaeology* 27: 418-442.

狩猟採集民と隣人との相互関係の動態

池谷 和信

(国立民族学博物館)

1. はじめに

およそ10万年前に新人(ホモ・サピエンス)がアフリカ大陸の外に拡大してから現在にいたるまで、「狩猟採集民」は地球上の広い範囲において適応してきた(池谷 2017b)。彼らは、狩猟や採集や漁撈などの生計活動を複合的に利用することによって、あるいは農耕民や牧畜民のような自らの居住地を拡大する食糧生産者に同化することもあった(Spielmann and Eder 1994, Ikeya *et al.* eds. 2009)。その一方で、狩猟採集民と農耕民が、フィリピンのルソン島北部やコンゴ盆地のように数百年以上にわたり両者が共生している地域も知られている(Headland and Reid 1989 ほか多数)。

狩猟採集民と他者とのかかわりの人類史は、筆者によると以下のように4つに分類できる(池谷 2017a)。1) 狩猟採集民同士の関係、2) 農耕民との関係、3) 牧畜民との関係、4) 都市生活者との関係である。ここでは、パレオアジア文化史プロジェクトが研究目的にかかげている、旧石器時代の「新人狩猟採集民(筆者による用語)」(ホモ・サピエンス)と「旧人狩猟採集民(筆者による用語)」(ネアンデルタールやデニソワなど)の関係の仕方を明らかにすることが最終的な課題である。しかし物証の乏しさから当時の社会状況を再構成することには困難が付きまとう。「新人狩猟採集民」は、おそらく隣接する社会と社会経済的な関係を築いていた場合と築いていない場合とがあると推察される。これらの関係は、単純にパトロン-クライアント関係あるいは主従関係と定義できないであろう。「新人狩猟採集民」や「旧人狩猟採集民」が追求してきた生業活動や定住や遊動などの生活様式に応じて、両者の関係は歴史的に変わってきた可能性がみられる。

本研究では、先史時代から現在までの狩猟採集民と他者との関係を把握するために、東南アジアの大陸部における狩猟採集民と隣人との関係にかかわる事例を紹介することがねらいである(Ikeya and Hitchcock eds. 2016 ほか多数)。このことは、パレオアジアの文化形成の歴史

のなかで、狩猟採集民と他者との共存社会の形成過程や同化の過程について考察する上できわめて重要な手がかりを提供することになるであろう。

2. 東南アジア大陸部の事例

近年、東南アジアの大陸部に暮らす狩猟採集民ムラブリの研究が活発である(Bernatzik 1938, Nakai and Ikeya 2016, Oota *et al.* 2005, Pookajorn *et al.* 1992, Trier 1992, 2008 ほか多数)。これまでは、マレーシアのマレー半島におけるオランアスリの研究に集中していたが、タイラオスの熱帯モンスーン林に暮らすムラブリの生活が注目されている。ここでは、タイのムラブリを事例にして現在の狩猟採集民と農耕民との相互関係の動態を明らかにする。

ムラブリは、モンゴロイド系の狩猟採集民である。彼らは、竹を骨組みにして屋根にはバナナの葉をおおわせる小屋をつくり、季節的な移動生活を送ってきた。また、イノシシを主な狩猟対象にした槍猟を行ってきた。タイにおけるムラブリは、Phi Tong Luang あるいは Khon Pa (森の民)、Mlabri (森の民)、Yumbri などと呼ばれる。彼らは、タイ北部のナン県やプレー県からラオスのサイヤブリ県にかけて広く暮らしてきたが、タイでは政府の定住化政策の影響を受けて現在では定住生活を行っている。ムラブリの人口の推移をみてみよう。1976年には約25家族で8バンド、1982年には1バンド当たり15人からなり約140人(Trier 1986:7)、1990年には約200人、2003年には約270人(池谷 2004:25)のようにムラブリの人口は増加している。

タイ北部のムラブリをめぐるのは、Seidenfaden (1926)、Bernatzik (1938)、Pookajorn (1985)、Trier (1986)、Vongvipak (1992) などの文化人類学的・民族考古学的研究が蓄積されてきた。そこでは、ムラブリはモンゴロイド系の狩猟採集民として現存しているわずかな例であり、弓矢も吹き矢も使わずに槍を用いるなどの研究の価値が指摘されてきた(大林 1968)。またムラブリは、モ

ン (Hmong, Miao)、ヤオ (Yao, Mien)、カム (Khamu) などとの間に交易関係があり、森林産物と米、タバコ、塩、衣服、ナイフなどと交換しているという (田辺 1987: 763)。さらに最近では、狩猟採集民ムラブリを対象にした集団遺伝学の研究から、彼らは決して農耕以前の生活を示しているわけではなく、およそ 500～800 年前に農耕民から移行して生まれたとされた (Oota *et al.* 2005)。

3. 狩猟採集民と隣人関係の歴史の変遷

ここでは、各時代の狩猟採集民ムラブリと農耕民モン (ミャオ) との関係を既存の文献から抜き出しているが、常に同一のムラブリ集団を対象にして、その関係の変化をみているわけではない。この地域における両者の関係の歴史の変遷を概観する。まず筆者は、狩猟採集民ムラブリと農耕民モンとの関係のあり方の違いに注目して、過去 100 年を 3 期に区分する。

1) 1 期 (1919-1980 年) : 遊動ムラブリと遊動農耕民

タイ北部に位置するナンを中心として王国が形成され

ていた時期には、ムラブリはナンの諸王の臣下であり、毎年蜂蜜、籐、蠟を貢物として納めていたという。これらは仏教僧が記録した文書によっており、当時の彼らの人口は非常に多かったという (Bernatzik 1938)。ムラブリは、第 2 次世界大戦以前に、ラオスからメコン川を越えてきたというが、それを示す十分な証拠はない。

20 世紀の初めになると様々なムラブリ (ピー・トング・ルアング) 集団は、カム、ティン、ラフなどの山地民との結合を維持していた (図 1 参照)。しかし、タイ北部へのモンの移住に伴い、両者の接触が他の山地民のそれより数多くなったという (Seidenfaden 1926)。当時のムラブリの生活のようすは、オーストリアの民族学者ベルナツィークの民族誌に詳しい (Bernatzik 1938 参照)。

彼らは、竹の密林の中に住んでいたという。また、ムラブリのあるものたちは、彼らの隣人たちと物々交換によって米を得ようとしていた。時には、モンがこの森の放浪者たちに収穫時の畑で彼らの手伝いをさせ、彼らに食糧を与えることもあった (Bernatzik 1938)。タバコは、大量にそれを栽培している山地民、特にモンから物々交換によって手に入れていた。



図 1 ムラブリ (ピー・トング・ルアン) の居住地 (1936-37 年)

出所：ベルナツィーク 1968『黄色い葉の精霊—インドシナ山岳民族誌』大林太良訳。

1970年代の初頭においても、ムラブリは森林に暮らす狩猟採集民であった (Trier 1986)。ムラブリの男性が、時々、他の山地民と接触をして、ハチミツや薬用の根茎類と服、塩、タバコ、鉄類などを交換していたが、女性と子供が接触することはなかった。しかし1976年頃には、ムラブリは、モンの村人のための規則的な仕事を始めた。モンの焼畑地での陸稲栽培のための森林伐採である。

2) 2期 (1980-1998年) 遊動ムラブリと定住農耕民

1969-70年に、11のモンの家族が定着したあとに、1973年には、木材会社がこの地域の伐採権を獲得したために、木材の伐採がムラブリの生活域にも及んできた。例えば、Huay村とBow Hoy村でのムラブリとモンとの関係では、ムラブリは農耕の方法を教えられ、モンはその労働の代価として服や薬を与えた。またモンは、アルミ製のポットや川の水を運ぶバケツなどをムラブリに貸したりした (Vongvipak 1992:99)。

この時代になると、農耕民のあいだでは定住化がすすみ、ムラブリもまた農村の近くで長期間にわたって滞在するようになった。1982年の事例をみると、Doi Phu Kengでは30日間、Doi Luangでは18日間に及ぶ (Pookajorn 1985) (図2参照)。具体的には、すべてのムラブリ家族は、モンの焼畑農耕のために一年の多くは雇われるようになる。しかし、その仕事がないときには、深い森の中を移動している。彼らの主食は、モンから得られた米に依存するようになる。

この時代には、ムラブリが依存していた森林資源が急激に消えていくことになった。彼らのなかには、「森林が消えると精霊に罰せられる」という意識を持つ人もみられる。

3) 3期 (1998-2016年) 定住ムラブリと定住農耕民

ムラブリが暮らす新しい村の建設に関しては多くの論議を呼んだが、結局は1998年にナン県の西部にHuai Yuak村がつくられる。その後2000年にはムラブリに国籍が与えられたことで、ムラブリへの関心が高まる。このナン県のムラブリの村では観光が盛んになり、その道具化しつつあり、世俗の波に翻弄される姿が痛ましいという (坂本 2001)。2001年5月～2003年4月ナン県のHuai Yuak村にJapan Overseas Cooperation Volunteers (JOCV) 青年海外協力隊員 (女性) が入る。2001年6月から、日本のNGOザ・ピースの援助が始まる。

筆者の調査によると、ムラブリで自らの陸稲をつくっている家族が、2003年10月の2家族から2004年11月の5家族に増加していることがわかる。また、ムラブリがモンの畑仕事の手伝いをすると1日に50パーツ (約150円) のお金や食糧が与えられることになっている。さらに、モンは、都市に存在する旅行会社とムラブリとの仲介をしており、ムラブリの採集などの生業が観光客用のパフォーマンスとして新たに脚光を浴びることになる。

彼らは、近隣に暮らすモンとの関係を結んだ生業に従事している。主な仕事は、モンへの農業労働の提供であ

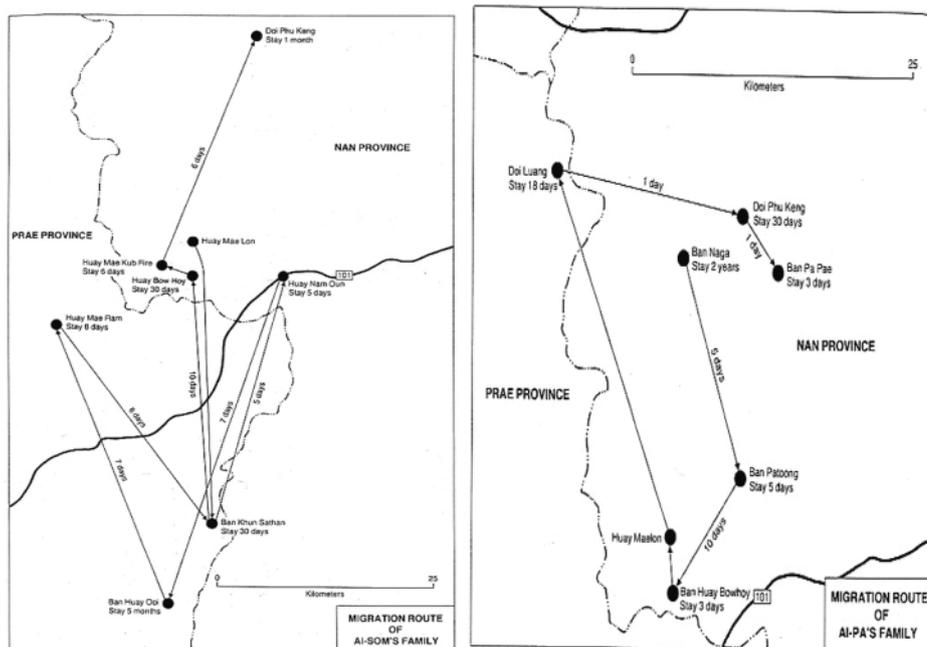


図2 モンの集落位置とムラブリの移動経路 (1982年)
出所: Pookajorn 1985

る。ただ、モンの中にも積極的にムラブリと労働関係を結ぶ人たちと、そうでない人たちがおり、ムラブリが労働を提供するモンはある程度メンバーに限られる。ムラブリはモンのトウモロコシ畑などでの労働によって、1日でブタ肉を2-3キロ、あるいは米を6-10キロ、あるいは現金を入手できるという。なお2003年10月現在、ムラブリ独自の畑が2カ所あるのみである。1つは個人で、もう1つはモンの共有地を利用している。NGOや政府は、ニワトリやブタの飼育、マッシュルームの栽培などをムラブリに導入しようとしてきたが、これまでその試みは成功していない。

彼らの生業として、観光客がこの地域に訪問した際のパフォーマンスが挙げられる。ムラブリの中年男性は、上半身裸のフンドシ姿になって、森の中での小型動物の狩猟およびシェルター製作などを観光客のまえで実演する。女性は、根茎類の採集をみせる。ムラブリは、その見返りとして、業者との仲介をするモンからブタ肉や現金を入手する。さらに、生業として森林産物の交易が挙げられるが、現時点では具体的な実態を把握していない。

近年、ムラブリ自らによる外部社会への積極的な働きかけもみられるようになった。たとえば2003年7月に、ムラブリが政府に電気の設置を要求しているという。しかし政府は、ツーリズムの振興の側面からムラブリの村に電気をとおしていないといわれる。また、政府の役人、ムラブリ、モンの観光ガイドによる、観光振興をすすめるための話し合いが行われている。さらに、現在、ムラブリの暮らす地域は、プサン国立公園から南に伸びる方向に位置しており、そこを国立公園に含める計画がある。ムラブリも関与して、NGO、ミッション、政府などでの話し合いが進められている。

4. まとめと考察

1) ムラブリとモンとの関係の変遷史

まず、過去100年あまりにおける両者の関係の変遷は、3つの時代に分けて考えることができる。両者とも移動生活を行っていた1期、モンの定住集落と関係する2期、両者とも定住する3期である。

1期は、ムラブリの蜂蜜や根茎類とモンのタバコや塩などが交換される交易関係がみられた。この時代は両者とも、移動生活であるために、特定の関係が継続するとは限らなかった。当時のムラブリは、竹の密林の中に住んでいる。そこには、彼らの生活の糧である根茎類、果実類、植物類が多いからである (Bernatzik 1938)。この点からも、森林資源に深く依存したムラブリは、両者のあいだの共生関係を維持していたとみなすことができる。

2期は、森林伐採などの環境変化のもと、モンの定住集落での長期にわたる農耕の手伝いのみられる時代である。そこでは焼畑での森林伐採、雑草の除去、収穫期の手伝いなど多彩なものが行われた。ムラブリの主食が米になっていることから、近隣社会との共存なしではムラブリは生存できなくなっていることがわかる。

3期は、ムラブリが自らの畑で農耕に従事する時期である。これまでは、農耕をまったく試みなかったムラブリの一部がトウモロコシの栽培を始めている。また、この時期におけるムラブリによる農耕民の手伝いに対しては、日当が支払われている。

以上のように、ムラブリとモンとの関係の歴史的推移から、熱帯モンスーン林をめぐる狩猟採集民と焼畑農耕民との関係は、交易から労働委託、観光をめぐる仲介者とパーフォーマーなどの多様な形を認めることができた。かつてムラブリの若者が、モンの放った火で焼かれる山肌をみて、「山を荒らしている」となげいたというが (坂本 2001)、モンはムラブリの暮しをどのように見たのであろうか。両者のあいだの社会経済的関係のみならず、お互いの他者認識の変遷などの把握は、今後の課題として残されている。

2) 狩猟採集民・農耕民関係の枠組み

以上のようなタイ北部に暮らすムラブリの事例は、先史時代の狩猟採集民と農耕民との関係を考える際に有効なものになるのだろうか。過去500年のなかで両者の関係の変遷について、下記のような4段階を設定することができる。

* 第1段階 農耕民から狩猟採集民への移行

この段階は、2章で言及したように考古学や歴史学から実証されたわけではないが、500～800年前にはムラブリが狩猟採集民ではなく農耕民であったという。この時代 (例えば15世紀) には、何らかの理由によって農耕民から狩猟採集民に移行したといわれる。このことは、狩猟採集民と農耕民が、フィリピンのルソン島北部のように数百年以上も共生関係にあったわけではないことを示している。

* 第2段階 遊動狩猟採集民と遊動農耕民

この段階もまた、歴史的に十分に実証されたわけではないが、2つの集団がそれぞれ遊動する社会の場合である。この場合、両者の関係は季節的に一時的につくられたと推察される。例えば、農耕の収穫期になると狩猟民が畑の近くに移動してきて、収穫が終わると2つの集団は離れていくことになる。

* 第3段階 遊動狩猟採集民と定住農耕民

この段階は、本稿のような歴史人類学的研究によって

実証することができる。現在、近隣に暮らす焼畑農耕民モンヤオ（ミエン）やタイが、19世紀には中国の南部から移住してきており、タイ北部の山地に定住していった。その結果、ムラブリとの間に様々な関係がつくられていく。この場合、ムラブリの居住地移動とともに特定の農耕民とのあいだに季節的な関係が生まれることになる。

*第4段階 定住狩猟採集民と定住農耕民

この段階では、タイ政府による定住化政策を受けることで、両者のあいだに固定的な関係が生まれた。例えば、トウモロコシの栽培、収穫をおこなう個々の農耕民に個々のムラブリがかかわることで、その関係は毎年継続していくことになる。

以上のように、狩猟採集民と農耕民との関係は、過去500年間のあいだに大きく変化していることがわかる。このため、現在の民族誌の事例から過去の集団関係を推定するには注意が必要である。つまり、初期人類の集団関係を把握する枠組みをつくるためには、民族誌とエスノヒストリーの研究を組み合わせる方法が不可欠になるであろう。

最後に、パレオアジア文化の形成史を考える際に必要なのは、冒頭で述べた筆者による研究枠組みのなかで、「狩猟採集民同志の関係の仕方とその変遷」である。今回の報告では、現在の狩猟採集民の民族誌的研究から出発したのでその問題にまではいたらなかった。しかしながら、2016年8月末に京都で開催された国際考古学会議(WAC)において、「アジアにおける先史時代の狩猟採集民と隣人との関係」を把握するパネルを筆者は設けた。そこでは、考古学的方法によってタイ国内の地域において同様の論点での議論ができた。今後、さらに広い時間軸をとることによって、歴史的、民族誌的かつ考古学的証拠をもとに、私たちは、冒頭で述べた「新人狩猟採集民」と「旧人狩猟採集民」とのあいだの関係について理論的・実証的な研究を進めていくことができるであろう。

参考文献

池谷和信 2004 「タイ北部におけるムラブリの資源利用をめぐる初期的報告」『総合地球環境学研究所 研究プロジェクト4-2 2003年度報告書 アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究：1945-2005』pp.25-27。
池谷和信 2017a 「狩猟採集民からみた地球環境史」池谷和信

編『狩猟採集民からみた地球環境史—自然・隣人・文明との共生』1-21頁、東京大学出版会。
池谷和信 2017b 「地球の先住者から学ぶこと」『狩猟採集民からみた地球環境史—自然・隣人・文明との共生』297-302頁、東京大学出版会。
大林太良 1968 「解題」ベルナツィーク 1968『黄色い葉の精霊—インドシナ山岳民族誌』大林太良訳。平凡社。
坂本比奈子 2007 「森の人・ムラブリ」綾部恒雄編『失われる文化・失われるアイデンティティ』明石書店。44-57頁
田辺繁治 1987 「ムラブリ」石川ほか編『文化人類学事典』弘文堂。763頁。
Bernatzik, H. 1938 *Die Geister des gelbe Blattern*. Munchen: Bruckmann. ベルナツィーク 1968『黄色い葉の精霊—インドシナ山岳民族誌』大林太良訳。平凡社。
Geddes W. R. 1976 *Migrants of the Mountains: The Cultural Ecology of the Blue Miao (Hmong Njua) of Thailand*. Clarendon Press.
Headland T., N. L. Reid 1989 Hunter-gatherers and their neighbours from prehistory and the present. *Current Anthropology* 30: 43-66.
Nakai S. and K. Ikeya 2016 Structure and Social Composition of Hunter-Gatherer Camps: Have the Mlabri Settled Permanently? In K. Ikeya and Robert K. Hitchcock (eds.) *Hunter-Gatherers and their Neighbors in Asia, Africa, and South America*. Senri Ethnological Studies 94, pp.123-138.
Ikeya K., H. Ogawa, P. Mitchell, eds. 2009 *Interactions between Hunter-gatherers and Farmers: from Prehistory to Present*. Senri Ethnological Studies No.73
Ikeya K., R. K. Hitchcock eds. 2016 *Hunter-gatherers and their Neighbors in Asia, Africa, and South America*. Senri Ethnological Studies No.94
Oota et al. 2005 Recent origin and cultural reversion of a hunter-gatherer group. *PLoS Biology* 3(3): 536-542.
Pookajorn S. 1985 Ethnoarchaeology with the Phi Tong Luang (Mlabri): forest hunters of northern Thailand. *World Archaeology* 17(2): 206-221.
Pookajorn, S. eds. 1992 *The Phi Tong Luang (Mlabri)*. Bangkok: Pdeon Store.
Seidenfaden 1926 Tha Kha Tong Lu'ang. *Journal of the Siam Society* 20(1): 41-48.
Spielmann K., J. F. Eder 1994 Hunters and Farmers: Then and Now. *Annual Review of Anthropology* 23: 303-323.
Trier, J. 1986 The Mlabri people on northern Thailand. *Contributions to Southeast Asian Ethnography* 5: 3-41.
Tungstiplakorn, W. 1998 Highland Cash Crop Development and Biodiversity Conservation: The Hmong in Northern Thailand. Ph.D paper University of Victoria.
Vongvipak 1992 Economic and social change among the Mlabri Pookajorn, S. eds. *The Phi Tong Luang (Mlabri)*. Bangkok: Pdeon Store.

「線具 lineware」

— 紐と糸をめぐる技術民族誌的研究

上 羽 陽 子 (国立民族学博物館)
金 谷 美 和 (国立民族学博物館)
中 谷 文 美 (岡山大学)

1. はじめに

人びとは、古来よりさまざまな線状物をもちてきた。線状物をつかってできたものには、布や衣服などの染織品、カゴやゴザなどの編組品、網や紐、コードなどの紐製品、刺繍糸や毛糸などの糸製品などがある。これらに関する既存の研究は主に、製品の加工技術や材料、使用方法や流通に焦点をあててきた。一方で、布を織るための糸、カゴやゴザを編むための芯や編材・組材、網や紐をつくるための糸や紐、刺繍糸や毛糸などの糸製品といった線状物を包括的に対象とした研究は進められてきていない。本研究では、先行研究において看過されてきた線状物に対して包括的なアプローチを試みる。

2. 線状物をめぐる先行研究

線状物をめぐる先行研究を概観し、本研究の位置づけをおこないたい。布や衣服などの研究において線状物は、単に複雑な染織品を構成するひとつにすぎないという認識が共有されてきた。それは、田口が次のように述べているとおり、布の特性に由来すると考えられる。つまり、「布は、人為的に作り出される製品の中で、もっとも特異な位置を占めており、それは既存研究の分野的な広がりとともに、製造工程の複雑さや、布の物質性に備わった特性自体に由来する」(田口 2002: 29) のであり、染織品の布を対象とすると、布や衣服などの複雑な染織品を構成する糸のような線状物の製作や使用は、布づくりのための膨大な道具(織機や織道具など)や、幾多にもわたる製作工程(製糸、整経、製織、染色、仕上げなど)のなかのひとつにすぎないという認識に導かれる。さらに、布自体が、標徴、アイデンティティ、権力、貨幣、経済的、社会的、政治的、宗教的に大きな役割を担ってきた(Schneider 1987、ワイナー&シュナイダー 1995)ため、布の文化人類学的研究においても、線状物に着眼した研究は進んでいない。

一方、カゴやゴザなどの編組品は、布などの染織品に比べて、素材や製作工程がより単純である。そのため、線状物の比重は染織品より大きいといえるが、やはり製作工程のなかに埋没する傾向がある。また、カゴやゴザなどの編組品の場合、それを必要とする生業や自然環境との結びつきが強いため、地域ごとの資源管理に注目した先行研究が多いことも特徴である(Ranjan 1986、Bahadur 1994、James 1997)。一方、紐・網・縄は、生業活動や儀礼の中で使用されてきたにも関わらず、生業や儀礼における使用について文化的にせまった先行研究は少ない(Ingold 2007 (2014)、額田 1986)。

このように、包括的に線状物にとりくんだ研究はこれまでみられないものの、私たちは、このような線状物が、人間の生活様式と深い結びつきがあり、「糸の製作と使用は、人間特有の生活様式の出現を示す適切な指標で」(Ingold 2007 (2014)) あるということ、容易に理解できる。人間は、束ねる、固定する、吊す、捕獲するといった食糧獲得と生産を目的として線状物を創り出してきた。そして、線状物として最も細いものは「糸」であるが、細すぎる糸は、ものの結束や固定には実用的ではない。つまり、人間が最初に創り出した線状物は、糸よりも太く、強度を兼ね備えている紐もしくは紐的線状物であるということは、推察できる。

例えば、インド西部のカッチ地方では、牧畜民のラバーリーは、ラクダの足を縛るためにラクダの毛を撚った紐を利用している(写真1・2: 2008年 上羽陽子撮影)。ラクダは、このように足を縛られると歩くことは出来るが、走って逃げることができない(写真3: 2010年 上羽陽子撮影)。

また、私たちは、紐1本で、多くのものを運ぶことを可能にしてきた。図1のように、紐を使えば大きな荷物を背負うこともできる(図1: 額田 1986『ものと人間の文化史 57 ひも』p.101)。その他にもインド南東部のオディッシー州では、収穫物を紐でまとめて、さらに棒をつかって天秤状にして頭上運搬で多くのものを運ぶこと

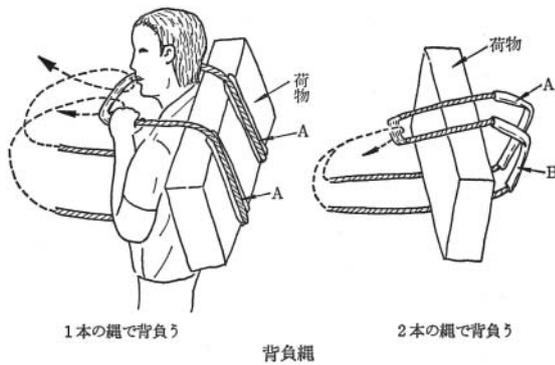


図1

を可能にしている (写真4:2013年上羽陽子撮影)。

3. 「はじめにヒモありき」

現在、私たちは、撚る、編む、織るといった技術を用いて撚紐、編紐、織紐を生みだしている。そのため、すでに糸が先にあり、それを加工して紐にすると思いがちである。つまり、「糸」→「紐」→「縄」の方向で線状物の発達をみているといえる。しかし、前述したように、人間が最初に創り出した線状物は、糸よりも太く、強度を兼ね備えている紐の線状物であり、つまり「はじめに紐ありき」なのである。

一方、私たちはこの「紐」という言葉から、いろいろなものを想起してしまう。それは既製の文化にみられる固有の概念から離れることができなためである。そのため、本研究ではあえて、「紐」や「紐の線状物」を「ヒモ」と定義する。つまり「はじめにヒモありき」なのである。

では、「はじめにヒモありき」の、ヒモとはいったいどのようなものであろうか。それを推察できる事例を2つ紹介する。

事例1：インドネシア・ティモール島におけるパルミラヤシのヒモ

インドネシア、ティモール島では、パルミラヤシ（オウギヤシ）(学名：*Borassus flabellifer*) の樹液を採取し、ヤシ砂糖をつくっている (写真5:2016年上羽陽子撮影)。樹液を採取するための容器や、その容器を吊り下げるための容器にも材料としてパルミラヤシが利用されている (写真6:2016年中谷文美撮影)。採取した樹液は、煮詰められた後、パルミラヤシの葉部分を裂いたものを輪状にして結び留めをした枠に流し込まれる (写真7・8:2016年上羽陽子撮影)。乾燥後、ヤシ砂糖は調味料として市場などで販売される (写真9・10:2016年上羽陽子撮影)。ヤシ砂糖づくりにおいて、身近なパルミラヤシ

を用いた「ヒモ」がもちいられている。(写真11・12:2016年上羽陽子撮影)。

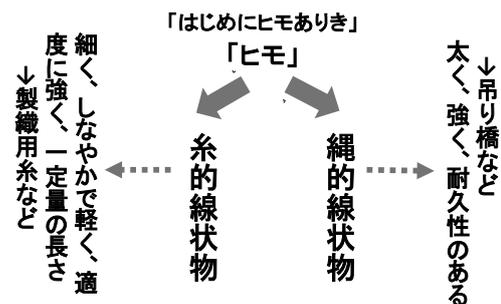
この「ヒモ」の特徴は、線状物の長さや幅を変えることで、1個の大きさや量を自由に調整することができることである。単純な形態にもかかわらず、量の調整が自在にできることによって、用途に応じて簡単に使い分けができるという特性をもっているのである。

事例2：マダガスカル・ザフィマニリにおけるカヤツリグサのヒモ

マダガスカルの中央高地に住むザフィマニリの人びとは、身近なカヤツリグサ科の草を採取して、その草を叩いて平らにして編材とし、敷物やカゴ、帽子などをつくっている (写真13・14・15:2012年上羽陽子撮影)。彼らは、草を採取して持ち帰るときに、運びやすいように、同じ草をもちいて2カ所を結び留める (写真16・17:2012年上羽陽子撮影)。これはザフィマニリに限らず、ひろく草などの採取現場でみることができるもので、近くにはえている草を引き抜いて、ものを束ねるために「ヒモ」的に使用する。この「ヒモ」の特徴は、採集現場から家に持ち帰るまでの間に使用し、家に帰ったら捨ててしまうことである。一度かぎりの使用で、わずかな時間しかもちない。しかし、束ねて運ぶためにはとても重要なものであるといえる。また、結び方に、地域差や民族差をみることができる。

このような事例における「ヒモ」が、おそらく人間が最初に創り出したであろう「ヒモ」であると推察できる。この「ヒモ」に着目することで、「糸」→「紐」→「縄」の方向で線状物の発達をみるのではなく、はじめにヒモがあって、「ヒモ」から縄の線状物と糸の線状物のふたつに分かれて改良が繰り返されたとみなす、「はじめにヒモありき」という仮説を検証したい (図2)。

ひとつは、強度を求めた線状物として「縄」への改良である。「ヒモ」よりも、太く、強く、耐久性のある線状



天然資源から糸(糸的線状物)を生みだすこと
→素材加工や製糸技術に幾重にも改良を加える必要があり、技術改良の終点ともいえる生産活動。

図2

物をめざした改良として、吊り橋にもちいるための線状物などがある。もうひとつは、「面」をつくるための線状物、つまり布の製作にもちいるための「糸」への改良がある。布の製作は、細くて、しなやかで軽く、適度に強い糸が一定量あって可能となる。天然資源から糸、もしくは糸の線状物を生み出すことは、素材加工や製糸技術にいくつもの改良を加える必要があり、線状物をうみ出す技術改良の終点ともいえる。以上述べたように、「はじめに糸ありき」ではなく、「はじめにヒモありき」ということを本研究で提示したい。

4. 「ヒモ」の特徴

「ヒモ」の特徴は、1) 単純な形態と機能、2) 一時的な使用、3) 植物素材・動物素材、4) モノ単体からの情報が限定的であることの4点である。

単純な形態と機能を持つ「ヒモ」は、自然環境や生業との結びつきが強く、地域差や生業差が顕著にあらわれるため、種類が多い。また、事例で示したように、「ヒモ」は、一時的に使用し、使用後、捨てられることが多いことも特徴である。そして、植物素材・動物素材といった使用素材の性質から、遺物としても、博物館資料としても残りにくい。さらに重要なこととして、モノ単体からの情報が限定的であることが指摘できる。つまり、「ヒモ」の使用前・使用後の状況からだけでは、具体的使用法やその背景にある地域・民族性、用途などの文脈をくみとることが困難である。そのため、使用現場をおさえる調査が必要となり、これは文化人類学の得意分野となる。

さらに、このような特徴に加えて「ヒモ」は、自然環境の変化や文化接触などの影響を受けやすい特性がある。また、素材や線状物にたいする信仰や禁忌をもつ社会は多く、標章・表象として儀礼時に役割を持つことがある。そのため、他の文化要素が変化しても、その素材や形態をとどめる可能性がある。したがって、「はじめにヒモありき」という命題における「ヒモ」は、パレオアジア考古学との接点として B01 班のかかげる研究課題である「環境」、「生業」、「制度」、「観念」とを結びつけるツールであるといえる。

5. 「線具 lineware」という概念

ここまで「ヒモ」という言葉を使ってきたが、はたして事例に挙げたヤシ砂糖づくりでつかわれていたヤシ棒という線状物や、草を束ねるための草は「ヒモ」であろうか。「ヒモ」といったときに、私たちは、既存の文化概

念に依拠して「ヒモ」を想起する。しかし、例えば、インドネシアでは、束ねる、合わせる、結ぶ、編むといった材料が現在も豊富に存在している。それらは、ヤシ種の葉脈 (fronds)、竹を割ったヒゴ、草、ココヤシの繊維のような身近な素材を利用してきたため、包括的な呼び名や定義がなく、生産現場では素材名で呼ばれることが多い。このような状況において、本研究では、「ヒモ」という既製の文化固有の概念から離れて、ニュートラルな概念をもちいるための、テクニカルタームを創出する必要があると考えた。

そこで本研究では、人類が最初に創り出したであろう「ヒモ」を「線状的道具」と定義し、「線具 lineware」と名付けることにする。「線具」の定義は、1) 素材を加工した線状物、2) 線状物自体が完成品、3) 線状物自体に使いみちがある、この3つを兼ね備えるものとする。

ここで重要なことは、「線具」を繊維物と限定しないことである。「線具」と名付けた目的は、既存の文化固有の概念から離れて観察したり、考察したりするためである。つまり、「糸・紐・縄」といったものから連想される、織物、編物、刺繍、縫物といった先行研究による製品物の分類や、結ぶ、織る、編む、撚るといった紐や糸の代表的な加工技術の分類に縛られることなく、人類が最初に創り出したであろう、「ヒモ」を含めた「線状的道具」にたいして包括的にアプローチすることのできる、「線具」という名付けと定義が重要なのである。そのために、「線具」を繊維物と限定せず、刺繍糸、織糸、針、巻尺、物干し竿など繊維から離れた線状的道具についても「線具」と定義する。

既存の文化固有の概念から離れて「線具」というテクニカルタームと概念を使って、本研究では「線具」の生産・使用・消費が同じ場でおこなわれている小規模社会でのフィールドワークを実施し、人間が最初に創り出したであろう、単純な形態と機能を備えた一時的な使用物と推察できる「線具」を取り巻く動態を検討することが、パレオアジア文化史学の命題である「ホモ・サピエンスがいかに生態資源を活用したのか」を解明するにあたって、有効な手段であると考えられる。

【参考文献】

- 上羽陽子 2006 『インド・ラバリー社会の染織と儀礼—ラクダとともに生きる人びと』 昭和堂。
- 金谷美和 2007 『布がつくる社会関係 インド絞り染め布とムスリム職人の民族誌』 思文閣出版。
- 田口理恵 2002 『ものづくりの人類学』 風響社。
- 中谷文美 2003 『「女の仕事」のエスノグラフィ パリ島の布・儀礼・ジェンダー』 世界思想社。
- 額田巖 1986 『ひも (ものと人間の文化史57)』 法政大学出版局
- ワイナー、アネット&ジェーン・シュナイダー(編) 佐野敏行

(訳) 1995 『布と人間』 ドメス出版。

Bahadur, Mutua 1994 *Cane & Bamboo Crafts of MANIPUR*: Mutua Museum.

Barber, E. J. W. 1991 *Prehistoric Textiles*: Princeton University Press.

James, J. Fox 1977 *Harvest of the Palm Ecological Change in Eastern Indonesia*: Harvard University Press.

Ranjan, M. P. 1986 *Bamboo and Cane Crafts of Northeast*

India: National Institute of Design.

Schneider, Jane 1987 The Anthropology of Cloth. *Annual Review of Anthropology*. 16: 409-448.

Seiler-Baldinger, Annemarie 1994 *Textiles A Classification of Techniques*. Australia: Crawford House Press.

Tim, Ingold 2007 *Lines A brief history*: Routledge. (タイム・インゴルド著、工藤晋翻訳 2014 『ラインズ 線の文化史』左右社。)



写真 1



写真 2

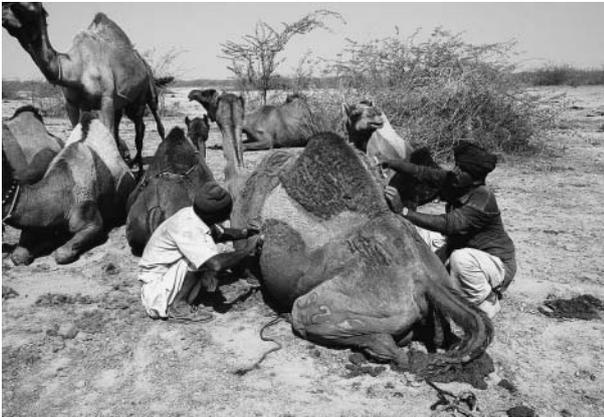


写真 3



写真 4



写真 5



写真 6



写真 7



写真 8



写真 9



写真 11



写真 10



写真 12



写真 13



写真 14



写真 15



写真 17



写真 16

生業技術の内在的な展開

中国・大興安嶺森林地帯におけるトナカイ飼育技術の事例報告

卯田宗平

(国立民族学博物館)

1. はじめに

本稿は、中国東北部・大興安嶺森林地帯においてトナカイを飼育する少数民族（以下、E族と記す）を対象とし、生業環境が変化するなかでの技術的な対応の事例を紹介するものである。本プロジェクトのB01班（人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築）では、さまざまな環境条件のなかで物質文化とそれを利用する知識がいかに変化するのか/しないのかという問いを実際のフィールドで観察される事例を積み重ねながら考察していくことが求められる。本報告書で取りあげるE族の事例は、とりまく自然・社会環境が変化するなかで既往の技術を個々の状況にあわせて援用し、技術を大きく変化させずに対応した事例である。

東北アジア地域の生業様式をまとめた研究によると、この地域の生業は自然条件や生産方法、生産物の特徴などにより、①タイガでの狩猟、②北極海沿岸での海獣の狩猟、③アムール川などの河川流域での漁撈、④小規模のトナカイ群を交通手段として利用しながら狩猟に依存するタイガでの狩猟・トナカイ飼養、⑤肉生産を主目的とするツンドラでのトナカイ牧畜、⑥ステップおよび森林での牧畜と農耕という六つに分けることができる（岡・境田・佐々木 2009: 308）。こうした分類のなかで、トナカイが飼育されているのはタイガとツンドラである。ツンドラ地帯ではトナカイの餌となる地衣類が豊富にあるため、人びとは数千頭、数万頭のトナカイを飼育することが可能である。ツンドラ地帯では肉生産を主な目的とするトナカイ飼育がいまでも続けられており、トナカイは「生業の対象」である。

一方、タイガではツンドラほどに地衣類が豊富ではないため、大量のトナカイを飼育することはできない。しかし、タイガでは針葉樹林帯がみられ、そこにはさまざまな野生動物が生息している。このため、人びとは森林地帯における動植物の狩猟や採集、河川での漁撈を複合的に組み合わせることができる。そして、人びとは森林地帯のなかを広く移動する必要がある狩猟や漁撈のとき

に荷駄運搬用や騎乗用としてトナカイを利用するのである。このように、上記④に分類される生業様式では、トナカイは「生業の対象」ではなく「生業の手段」としての役割を担っている。

さて、本稿が対象とするE族らもかつて大興安嶺森林地帯においてトナカイを手段として利用しながら狩猟や漁撈を続けていた。しかし、2003年以降に実施された定住化政策によって大興安嶺森林地帯での狩猟や漁撈は終了した。こうした変化のなか、荷駄運搬や騎乗のときに利用されていたトナカイはその役割を終えたかにみえた。しかし、E族らは2003年以降もトナカイの飼育を続けている。

彼らがいまでもトナカイの飼養を続けるのはその角を採取するためである。中国ではトナカイの角に「精力を増強する」や「腎臓の機能を助ける」といった効能があるとされ、高い商品価値がつく。こうした市場価値を背景に、E族らは毎年生え替わるトナカイの角を仲買人や観光客に販売することで生計を維持しているのである。本稿では、トナカイの飼育目的が「生業の手段」から「生業の対象」に変化するなか、E族らの技術的な対応の事例を報告する¹⁾。以下では、著者の調査および既往研究の成果（中国人民大会民族委員会 1958、卡 2006、王 2012）を踏まえ、「北方の三位一体」の生業様式が終焉を迎えた過程をみてみたい。

2. 調査対象地の概要

まず調査地の概要を示しておく。調査対象地は内モンゴル自治区呼倫貝爾市G市のA村である。G市は北緯50度20分から50度30分、東経120度12分から122度55分に位置し、南北が240.4 km、東西が198.8 km、面積は約2万平方 km である。市の平均海拔は1,000 m 前後である。この市は大興安嶺森林地帯の西側に位置し、市の面積に占める森林被覆率は70%を超える（根河市史志編輯委員会 2007）。

本稿で取り上げるA村は市の中心部から4 km 離れた

位置にある。この村には計 59 戸、162 人が住み、そのなかで E 族が計 107 人（全体の 66%）、それ以外の民族が計 55 人である。現在、A 村に住む E 族らは、かつて A 村から北方向に直線距離で約 150 km 離れている満歸鎮において冒頭で記した分類④に該当する生業様式を続けていた。その後、G 市政府は大興安嶺森林地帯で狩猟をおこなう E 族らを市中心部に移住させることを決定し、現在の A 村を新しく建設したのである。移住の目的は、大興安嶺における森林環境の保護と少数民族の生活水準の向上である。

市政府は 2002 年に市中心部より 4 km 離れた林場に新たな住居を建設した。敷地内に建てられた木造の家屋にはキッチンやトイレ、温水シャワー室などが完備されている。また、上下水道や電気、有線放送（テレビ）なども整備されている。このほか、敷地内には保健所や老人ホーム、小学校、郵便局、銀行なども建設された。そして、2003 年 8 月、この地に満歸鎮から E 族などが移住してきたのである。

G 市への移住とともに銃の所有が禁止されたことで森林地帯での狩猟活動は終了した。また、新たに建設された A 村は大興安嶺から離れているため、森林地帯を流れる河川での漁撈活動もおこなわれなくなった。これにより、E 族らが大興安嶺で長年続けていた生業様式は終了したのである。

3. トナカイ飼育の方法

本章では、E 族らによるトナカイ飼育の方法をまとめる。現在、大興安嶺森林地帯には計 8 か所のトナカイキャンプ地がある。キャンプ地でトナカイ飼養に従事するものは計 29 人（男性 14 人、女性 15 人）である。彼らの平均年齢は 47 歳である。最高齢は MLYS キャンプ地の MLYS 氏（女性）で 90 歳である。もっとも若いものは MLYS キャンプ地の MR 氏（男性）で 20 歳である。トナカイ飼養に従事している人たちの民族をみると、E 族が 21 人、H 族が 5 人、それ以外が 3 人である。トナカイの飼育に従事するものは、いずれも一定の期間キャンプ地に滞在し、トナカイの世話をした後、A 村に戻るということを繰り返している。

キャンプ地の構成員が最も多いのは DML キャンプ地であり、その数は 7 人である。次いで MLYS キャンプ地で 6 人である。一方、DW、SS、BDX、YSH、SYL キャンプ地はそれぞれ 2-3 人である。構成員の多さはそこで飼育するトナカイの数の多さとも関係する。キャンプ地で飼養されているトナカイは計 700 ~ 800 頭であるが、もっとも多くトナカイを飼育しているのは MLYS キャン

プ地である。その所有数は 300 ~ 400 頭である。次いで DML キャンプ地が 140 頭前後を所有している。一方、トナカイ飼養に従事するものが少ない YSH や SS キャンプ地では所有数が 20 ~ 30 頭程度である。

4. トナカイの利用目的の変化とエヴェンキ族らの技術的な対応

冒頭で述べたように、E 族らはかつて狩猟時の移動の手段としてトナカイを利用していた。その後、2003 年の定住化政策の実施以降、彼らは毎年生え替わる角を採取するためだけにトナカイを飼育するようになった。つまり、E 族らにとってのトナカイは「生業の手段」から「生業の対象」に変化したのである。こうしたなか、彼らはどのような技術によってこの変化に対応したのであるか。本報告書では、トナカイを飼育し続けるうえでもっとも重要な技術であると E 族らが考える「生後間もない仔トナカイへの介入（odachi 技術）」について紹介する。

E 族らは、彼らが boracha とよぶ馴化個体の飼育数を増やすことで、角の生産量を増やしたいと考えている。Boracha と呼ばれる馴化個体は角の採取のときに接近する人間に対して忌避反応を示さない。このため、人間を恐れない boracha を多くつくることで森林地帯にいるトナカイの捕獲とその角の採取を効率よくおこないたいと考えている。E 族らはトナカイを人間に馴れさせる技術を odachi とよぶ。彼らはとくに生後間もない仔トナカイに対して odachi をおこない、人間を恐れない個体をつくるのである。以下では、仔トナカイへの人為的な介入の事例をみてみたい。

トナカイの出産期は毎年 4 月末から 5 月上旬にかけてである。E 族らはトナカイが出産期をむかえると群れのなかで腹が大きくなった母トナカイを、kure とよばれる直径約 30 メートル、高さ約 2 メートルの柵のなかに入れる。母トナカイは、柵のなかで人目のつかないところに移動し、出産をする。E 族らは母トナカイが出産してもすぐには近づかない。これは「仔トナカイに人間の臭いがつくと母トナカイは仔の育児を放棄することがある」からである。彼らは、トナカイが出産した後、1-2 日が過ぎると母トナカイのまわりにいる仔トナカイを捕まえようとする。彼らはまず、手に塩を持ち、それを舐めにくる母トナカイを捕まえ、木に繋留する。母トナカイはすでに人間との間に親和性を確立しているため簡単に捕まえることができる。その後、母トナカイのまわりにいる仔トナカイを捕まえようとする。しかし、人間に馴れていない仔トナカイは人間が少し接近するだけで逃げてしまう。ただ、母トナカイをキャンプ地近くに係留して

いるため、仔トナカイが遠くに逃げることはない。E族らは数人が一組になり、仔トナカイに近づき、逃げまわる仔トナカイを囲い込む。そして、仔トナカイを捕まえて首紐（comatton）を付ける。

彼らは捕まえた仔トナカイを母トナカイの近くに繋ぎ止める。その後、母トナカイを放つ。母トナカイはやがてエサを探しに森林のなかに入るが、数時間もすると仔トナカイのところに戻ってくる。彼らは戻ってきた母トナカイを捕まえて仔トナカイの近くに繋ぎ止める。そして、再び仔トナカイを自由にする。その後、仔トナカイもエサを探しに森林のなかに入るが、数時間後には再び母トナカイの近くに帰ってくる。すると、彼らは仔トナカイを再び捕まえ、母トナカイの近くに繋ぎ止める。

トナカイの出産期間、彼らは生後間もない仔トナカイを捕まえたり放したりする作業を一日に何度も繰り返す。このことで仔トナカイに「人間に触れうる親和性」を確立させるのである。彼らはこのodachi作業を「仔トナカイがおとなしくなるまで続ける」という。ここでいう「おとなしくなるまで」とは人間が仔トナカイに近づいても逃げださず、仔トナカイの腹を抱きかかえて持ち上げても暴れないようになるまでである。生後1-2日目からodachi作業がおこなわれ、一日に何度も人間に捕まえられることを経験する仔トナカイは徐々に人間に馴れ、人間が近づいても忌避反応を示さないようになる。

このodachi技術は生後4-5日目の仔トナカイにおこなうことが重要であるとされる。生後すぐの仔トナカイに人間が介入すると「仔トナカイに人間の匂いが付いてしまい、母トナカイは人間の匂いが付いたわが子への授乳を拒否するから」である。そのため、彼らは生後すぐの仔トナカイにはodachiをしない。一方、生後6-7日を過ぎると仔トナカイは人間を避けて逃げる速度が速くなるため、仔トナカイを捕まえるのに手間がかかる。そのため、彼らは生後4-5日後の仔トナカイにodachiをおこなうのである。

5. 生業技術の“内在的な展開”

以上、本報告書ではE族らにとってトナカイが「生業の手段」から「生業の対象」に変化するなか、彼らの技術的な対応をみてきた。この結果、彼らはodachi技術によって馴化個体を増やしながらか商品価値のある角の生産量を上げようとしていることがわかった。このodachi技術は、E族らがかつて移動の手段として使用していたトナカイを手元に確保しておくために利用していた技術である。彼らは狩猟活動の際に森林内を移動する必要があり、人間との間で親和性を確立した個体（boracha）を一

世帯あたり数十頭ほど所有し、騎乗や荷駄運搬として利用していた。当時もそうした馴化個体をつくるのにodachi技術を使用していたのである。その後、狩猟活動が禁止されたり、トナカイが「生業の対象」に変化したりするなかで、彼らは生後間もない仔トナカイにodachiという人為的な介入をし、角を採取するときに容易に捕まえることができる馴化個体を増やそうとしたのである。こうしたE族らの対応をみてみると、彼らは生業環境が変化するなかで新たな技術を導入したわけではなく、かつての飼養技術を援用し、いわば技術の「内在的な展開」によって対応したということができる。

生業環境が変化するなかで外部から新たな技術を導入せず、従来の技術で対応する事例は著者によるほかの調査結果のなかでもみることができる。たとえば、滋賀県琵琶湖では1980年代より移入外来魚（オオクチバスやブルーギル）による淡水生態系への影響が問題化し、琵琶湖の漁師や生態学者が滋賀県に対応を求めている。こうした働きかけに応じて、滋賀県は2002年4月より移入外来魚の駆除を目指した「有害外来魚駆除事業」を実施した。この政策は、琵琶湖の漁師たちによって獲られた外来魚を滋賀県が一定の単価で購入することで、漁師たちに外来魚を積極的に捕獲させる（＝駆除させる）ことを目的としたものである。漁師の側からみれば、外来魚の単価が固定されたことで仮に外来魚が獲れすぎたとしても値崩れを起こさない「漁獲資源」になったのである。

著者が調査をしていた滋賀県近江八幡市沖島の漁師たちは、外来魚駆除事業の実施以降、湖岸の藻場や人工物の近くに多く生息する外来魚の捕獲を試みた。湖岸の藻場などに生息する外来魚を一度に多く捕獲するには、そこに底曳き網を打つことが有効である。しかし、沖島の漁師たちはそうした漁場で外来魚を捕獲するという経験がこれまでなかった。こうした状況のなか、漁師たちは藻場に生息する外来魚を獲るためにゴリ（ヨシノボリ）の底曳き網を援用することで対応した。琵琶湖沖島には、ゴリのほか、ワカサギやアユを狙うときに使用される底曳き網が計5種類ある。そのなかで沖島の漁師たちがゴリ底曳き網を使用したのは、ゴリの曳き網がほかの曳き網に比べて丈や曳き縄が短く、水深の浅い藻場でも小回りが利き、操業しやすいと考えたからである。前記のように、外来魚漁は湖岸付近に群生する藻のなかへ底曳き網を打たなければならない。そのため、ゴリ底曳き網に対する改良は「袋状の曳き網内部への藻の流入をいかに防ぐか」という一点のみに集中した（卯田 2005, UDA 2010）。沖島の漁師たちによる漁撈技術の改良に関しては別稿を用意しているが、いずれにせよ彼らは外来魚が「漁獲資源」になるなかで既往の漁業技術を積極的に援用す

ることで対応しているのである。

6. おわりに

本稿では中国東北部・大興安嶺森林地帯においてトナカイを飼育するE族らを対象とし、生業環境が変化するなかでの彼らの技術的な対応を報告した。本稿では技術の変化を取りあげたが、著者はかつて生業技術の変化を異なる二つの方向性に分けて議論したことがある（卯田2003）。それは「技術の発展」と「技術の展開」である。技術の発展とは、人間の身体的な動作や道具が機械化すること（たとえば、底曳き網の手繰り作業が自動揚網機に変化することなど）や、人間の知識や記憶が外部で記録されること（たとえば、ヤマアテによる漁場位置の記憶からGPS装置による漁場位置の記録に変化することなど）である。一方、技術の展開とは自然や社会環境の変化に対応するかたちで従来の生業技術を再編したり、援用したりすることである。本報告書で示した事例は、E族らがそれまで使用してきた技術を援用することで対応した事例であった。本報告書のタイトルに「展開」という言葉を入れたのはこのためである。ただし、生業技術は自然環境の条件や捕獲対象となる動物の行動特性、商品経済の浸透度合いなどによってその変化の様相が大きく異なる。今後は、さらに事例を積み重ねることで技術の展開あるいは発展が起こる要因、その変容に関わる類似性や地域固有性をみていく必要がある。

注

- 1) 本稿の内容は卯田（2015）に基づいている。なお、本調査は科研費「中国大興安嶺における生業環境の変化とトナカイ飼養民の適応形態：1940-2010」（2587018、代表者：卯田宗平）およびアジア経済研究所プロジェクト経費を使用した。本プロジェクトでは、これらの成果を踏まえながら現生の集団における技術の変化を検討する。

参考文献

- 岡洋樹・境田清隆・佐々木史郎
2009 『朝倉世界地理講座2 東北アジア』、東京：朝倉書店。
- 卯田宗平
2003 「漁撈活動における「技術」について」『国立歴史民俗博物館研究報告』100：25-46。
2005 「「生業の論理」を組み入れた自然再生のあり方—琵琶湖・有害外来魚駆除事業の事例から—」『環境社会学研究』11：202-218。
2015 「ポスト「北方の三位一体」時代の中国エヴェンキ族の生業適応—大興安嶺におけるトナカイ飼養の事例」『アジアの生態危機と持続可能性—フィールドからのサステナビリティ論』、千葉：アジア経済研究所研究双書616、73-108。
- UDA, Shuhei
2010 “The Behavior of Fishers after Implementation of the Project to Exterminate Nonindigenous Fish in Lake Biwa, Japan.” *Human Ecology* 38 (7), 237-249.
- 根河市史志編輯委員会
2007 『根河市志』内蒙古：内蒙古文化出版社。
- 卡丽娜
2006 『驯鹿鄂温克人文化研究』辽宁：辽宁民族出版社。
- 王卫平
2012 『社会变迁中的使鹿鄂温克族』、北京：中央民族大学博士论文。
- 中国人民大会民族委员会
1958 『内蒙古自治区额尔古纳旗使用驯鹿的鄂温克人的社会情况』、北京：中国人民大会民族委员会。

生態資源獲得の道具と技巧の人類学的研究にむけて

野 林 厚 志

(国立民族学博物館)

1. 「技術単位」の批判的検討

本研究の目的は、人類が生態資源の獲得に使用してきた道具の特徴を、(1) 形態上の要素、(2) 機能上の要素の2点に注目して分析し、(1) と (2) について、通文化的に比較可能な指標の抽出を試みることである。オズワルト (1983 [1976]) の導入した「技術単位」に発想を得ながらも、パレオアジアの研究課題である自然環境への適応と文化伝達の課題を念頭におきながら、道具の機能形態論へ展開させることをねらいとしている。

オズワルトが「技術単位」という枠組を系統的に示したのは、1973年に刊行した *Habitat and technology* である。本書の中では、component (構成要素) と定義され、それに続く、1976年の *An Anthropological Analysis of Food- Getting Technology* (『食糧獲得の技術誌』1983年翻訳) では、technounits (技術単位) という名称での定義があらためて行われている。後者では、扱う民族誌の量が増えると同時に、食料を獲得するための道具により焦点をあてた分析と考察が行われた。オズワルトが食糧獲得の道具に議論を絞らしたのは、衣服や家屋、容器、運搬装置よりも重要であるという見通しがあったからであるとされている (オズワルト 1983:307)。

「構成要素」、「技術単位」はともに、道具の「技術」や複合性を評価するために設けられた指標である。そこで貫かれている原則は、道具を構成する素材の数 (種類) の総和を算出し、それを技術の複雑さを表す指数として扱うということである。例えば、鉄製剣先を革紐でくくりつけた槍は指数が3となる。鉄製の剣先、木柄、接合させる革紐の3つで、この道具が構成されているからである。一方で、貝を割るために使用された自然石と先端を加工し尖らせた掘棒はともに1で等しい指数とされる。どんなに精巧に加工された掘棒も技術の複雑さとしての評価は1でしかない。

オズワルトの指数は、ある一定の基準で道具の評価を通文化的に行うという点において、新たな研究の展開、特に、異なる民族集団の事例の比較研究を促した点にお

いて評価されてきた。例えば、トレンスは狩猟や漁労にかかる時間と技術係数との関係を論じ (Torrence 1983)、ビンフォードはそこから技術の伝達の指導性の違いについて議論を拡張している (Binford 2001)。

オズワルトの指数を活用した比較研究において、しばしば説明されるのは、寒冷地域と温暖地域との間での技術差や先住民の技術差である (オズワルト 1983; Torrence 1983)。オズワルト自身は、集団の居住地域の自然環境、経済活動のありかた、技術単位の平均の関係を、極北圏-収奪-5.5、亜極北圏-収奪-4.8、温帯-収奪-4.0、熱帯-農耕・穀類-3.7、温帯-農耕-3.3、熱帯-農耕・根菜-3.2、砂漠-収奪-3.0、熱帯-収奪-3.0、熱帯-収奪-2.8、砂漠-農耕-2.4のように示している (オズワルト 1983)。トレンスは、民族集団と緯度との関係で説明し、高緯度地域ほど食糧獲得の道具についての技術単位が大きいと論じている (Torrence 1983)。ここで注意しなければいけないのは、緯度と技術係数とが相関しているように思ってしまうのだが、食料資源が存在する環境という観点から見ると違った側面が見えてくることがある。

オズワルトが最初にとりあげた12の集団の食料資源は、植物、陸生動物、内水面、海域から得られている。そして、高緯度地域において技術係数を高くしている集団は、海域もしくは内水面で使用する道具の技術係数が比較的高い。一方で、陸生動物の獲得のための道具については、各集団の間で技術係数の差が縮まっている (図1、表1)。

また、食料資源が野生—飼育・栽培、動物—植物といった2項対立的な分類でとらえられていることにも問題が残るであろう。狩猟採集社会から、農耕、牧畜社会へ進化的な移行を人類が果たし、生産性をあげるための技術の複雑さが植物 (農耕) にはあったものの、狩猟から牧畜への移行により、自然から食料を獲得するような技術が求められなくなったということが技術単位の数値差の単純な比較によって印象づけられるかもしれない (表2)。



Ethnic group	No.	Type total	Component Total	Plant	Inland Animals	Inland Aquatic animals	Marine animals
Angmagsalik	1	20	164	0	60	0	104
Caribou Eskimos	2	24	108	0	61	0	47
Paiute	3	20	95	18	52	25	0
Nabesna	4	16	87	6	62	0	9
Yahgan	5	19	69	0	40	0	29
Pitapita	6	15	63	7	48	8	0
Andamanese	7	9	45	4	14	0	27
Naron	8	9	40	1	39	0	0
Arunta	9	11	37	1	36	0	0
Ingura	10	9	30	1	15	0	14
Seri	11	9	30	1	17	0	12
Tasmanians	12	10	17	2	13	0	1

図1・表1 12の集団の食料資源の存在する生態環境域と資源の獲得に必要な道具の構成数の比較。集団名はオズワルト（1973）にしたがっている。

表2 生息地、野生か否か、動植物の相違で比較された技術単位（オズワルト p.108 野林改変）。

	植 物			動 物		
	道具数	技術単位総数	平均	道具数	技術単位総数	平均
陸上野生	45	75	1.7	28	53	1.9
陸上栽培・飼育	79	151	1.9	11	18	1.6
水中野生	2	5	2.5	44	104	2.4
水中栽培・飼育	1	1	1.0			
	127	232	1.8	83	175	2.1

また、使用されている民族誌データは、当時のアメリカ人類学が入手しやすい民族誌に偏っている点、コミュニティ、集落、民族集団の整理はあまりなされていないまま、民族集団に固有の技術単位が存在するかのよう印象を与えてしまうことになる。

2. 生態資源という視点

オズワルトが食料の獲得を人間の行動の最も基本的な要素として扱っていることに異論はないが、新人文化の形成を考えたときに、新人の行動を食料資源の獲得だけで説明するのは十分ではない。

人間の一連の行動には、1) 自然資源から自分の生活の

必要な資源を認識して、それを習慣的に獲得するにいたる過程、2) 1) の過程を個人や集団のなかで体系化していく過程が含まれる。そして、1) の過程では、自然資源が生態資源として扱われるようになり、2) の過程では、一連の行動がシステムとして生活の中にくみこまれ、生業活動として個人や集団の中に固定化し、継承されていくことになる。

人間にとって生態資源は食料だけではなく、それが必要であると認識されたあらゆる自然資源を含むと考えるべきであり、人間が生態資源を獲得するための多角的な行動を支える道具（技術）とそれを使いこなす人間の能力（技巧）を、生態資源の種類や性格、収奪される量といった属性に応じて整理する必要があるだろう。すなわち、自然環境の中から人間が自分に必要なものであるという認識にはじまり、必要性や重要性が評価されたうえで、獲得のための技術や技巧が生じ、それらが取捨選択されながら、世代をこえて継承していくという考え方である。

仮に、生態資源化への出発点が食料資源の獲得だったとしても、それらが生態資源として食料としてだけでなく、他のことに用いられるようになることは十分考えられる。例えば、野蚕は食用される地域もあれば、糸の生産にも使用される。当然のことながら、食用にする場合の道具やそれに必要な技術は、糸の生産に必要な道具や技術とは異なる可能性がある。この場合、野蚕という自然資源が生態資源として人間の生活に組み込まれた場合、技術の指数は食料獲得のための技術単位だけでは評価できないことになる。自然資源の獲得（技術・技巧）を自然に対する人間の反応であると考えた場合、食料資源に限定する必要はなく、資源を食料として利用するだけでなく、生活に必要な生態資源化を行っていくことをホモ・サピエンスの行動の特徴ととらえた視点が必要になる。

また、自然に対する行動の変化が獲得に生じる変化として反映していくと仮定した場合、1) 外部からの作用による変化、2) 内的（自発的）な変化、3) 誤作動（いわゆるコピーエラー）もそこに生じる可能性が考えられる。これらを把握するためには民族誌調査を通したものづくりの過程の把握も必要となる。

3. 生態資源獲得の技術と技巧の索引作成

従前に述べてきたように、食料資源だけでなく、それも含めた生態資源の獲得のための道具、それを使いこなす技巧、道具の製作のための生産具も対象とした「技術指標」の再定義を行い、それを活用した資料調査、フィールド調査の展開が今後必要となる。

道具そのものはオズワルトの原則にしたがいながらも、道具の構成物の数だけでなく、加工の程度を段階別に評価していくことも必要となる。

例えば、伐採用の鎌の握りの部分に滑り止めのゴムバンドが巻かれたものと、一定方向もしくは交錯様の切れ込みが入れられるものがある。オズワルトの指数であれば、前者はゴムバンドの分だけ指数が+1となり、後者には指数は与えられない。しかしながら、後者の切れ込みはゴムバンドの機能と同様に滑り止めに役にたつものであり、加工という指標が定義されていれば、それを構成要素とは異なる点で評価していくことが可能となる。さらに、それが所有の示票になる場合もある。もちろん、これらと同じ基準で得点化していくことは容易ではないが、指標同士の相関は示されるかもしれない。より複雑な技術指数をもった道具は所有性が高いといったことである。

道具にあわせた技巧（行動）も記載の対象として期待されるだろう。ただし、指標として扱う項目（要素）の検討が必要であり、熟練性や作業の難度といったイミク的な指標情報をとるためのフィールド調査は必須のものとなる。

オズワルトの「技術係数」に欠けていた生産道具についても同様な索引作成は可能である。生産道具の有無が生態資源獲得のための道具のありかたにどのように影響を与えるかという視点での調査は管見の限り存在しない。これらの情報は単一の社会や技術体系の中での議論ではなく、通文化的に比較することによって、生態資源獲得の道具の構成に差が生じる要因をさぐることができるかもしれない。

道具のありかたに影響を与える外的要因は、環境等の非文化的要因と文化（接触）の両方を想定していくことが求められる。環境に関するもの（気候タイプ、植物相、肥沃度、地形、地質等）は、生態資源獲得の技術の必要性や、その内容に少なからず影響を与えるであろう。例えば、生態資源が容易に入手できる環境下では、技術的に凝ったことをする必要がないため、技術指標が高くなるかもしれないが、必要な生態資源の種類によって資源量が異なる場合は、入手困難な資源の獲得のための技術はより洗練され、技術指標も高くなるかもしれない。また、道具に必要な材料が入手容易な環境や、加工に容易な材料が用いられている場合には、道具を長く大切に使う必要がなく、結果として凡庸な道具が沢山できる可能性もあるだろう。一般的に想定しうるこうした仮定とその反応を民族誌調査から検証していくと同時に、それを通文化的に比較、評価していくための指標作りが重要な課題となる。

一方で、こうした問題に文化的要因を組み込んで論じることができるのが、文化人類学や民族誌調査の強みである。例えば、首長の権威性が強固な社会は外的な物質が希少財として扱われ社会の中での存在が偏重したり、外部からの技術導入が遅れる、といったイノベーションの社会的な定着に関する仮定を実際の社会の中で生じている現象から検証することも可能となるであろう。

生態資源の獲得に資する道具の検証は、パレオアジアの規模では、特に環境条件による違いに着目しながらアジアの諸地域を対象に行うことが必要であるが、当面は従前の指標を検討していくための作業もあわせた調査を台湾で行うとともに、フィリピン、マレーシア等のオーストロネシア系の諸集団を対象を拡張していくことを考えたい。

台湾の先住民族である原住民族は、民族集団の自律性が高い一方で、外部（漢族）との接触の度合いが異なる歴史を有しており、社会組織の著しい相違（クラン主体、社会階層制、核家族、拡大同居家族、本家分家制）、言語的な分離（オーストロネシア語族に属する言語に共通な単語以外は通じない）、物質文化の共通点と相違点が混在している状況から、生態資源の獲得は環境反応なのかを相対化するのには適した調査対象と考えている。

[追記]

食料資源と生態資源に加えて、生業という用語の位置付けについて補足しておきたい。

現在、行われている生業活動の大半やそれに関わる知識は、いわゆる生態学的な資源の収奪行為だけでは説明することのできない、社会的、文化的過程をはらんでいることが人類学者から異口同音に指摘されてきた（岸上 2008, 大村 2009）。とりわけ、グローバル化が進む現代社会において、食糧獲得のための生業という行為はその存在意義を失いつつあり、人類学者に「生き方」であるとか、文化的行為とさえ言わしめるような状況さえ生まれている。しかしながら、考古学者の大半は生業研究が有するこうした背景についてはそれほど強くは意識していないかもしれない。

考古学における生業の課題は遺跡や遺物の分析と解釈という点では、比較的取り組みやすい分野であろう。なぜならば、遺物として残されるものの中で、食糧獲得に関連していたと想定できるものは圧倒的に多いからである。換言すれば、より厳密な議論を自然科学も含めた多様な手法で行うことが容易なのが生業に関わる課題であると言えるかもしれない。

大半の考古学者の視点は、生業活動とはあくまで生存に必要な食料資源の獲得という枠組からは離れていない。

しかしながら、考古学者が手にする資料は生業行動全体の中のどの過程にあるものなのかについて、それを確定するのはそれほど容易なことではない。例えば、1本の動物の骨が出土した場合に、そこから肉が完全に消費されて廃棄されたものなのか、それとも、途中で放棄されたものなのかを判断するためには、それなりの根拠が必要となる。実のところ、考古学の解釈の大半はこの部分をブラック・ボックスの中に入れてままにしていると言ってもよい。直接、摂取した食糧が推定できる古人骨の同位体分析にしても、実際に分析の対象としているのは個体であり、個々の行動差による結果の相違までも含めた摂食行動や生業活動を論じるためには、考慮していかなければならない変数は少なくない。

人類学研究が意味するところの生業と考古学研究が意味するところの生業の内容が本質的に乖離している状況が生じている状況を、考古学と人類学との学問体系の相違であるとして片付けてしまうのは容易であろう。しかしながら、人類が他の霊長類や野生動物と一線を画し、人類足らしめた基本的な要件の一つが食料資源の獲得から生態資源の獲得への転換であり、計画性、多角性、技術性、社会性といった人類に特有な諸要素が生態資源の獲得の行為に内包されているのであれば、食料資源の獲得が主題となる考古学的な生業研究と現在の生業活動を対象とした人類学的な生業研究の両者をつきあわせるための議論は必ずしも無意味ではないだろう。

日本の考古学で通常用いられている生業という用語は、英語の subsistence に相当する言葉として現在位置づけられている。2004年に出版された『現代考古学事典』では次のように説明が与えられている。

人類が生存していくために周辺環境からエネルギー源や栄養素などを得る主要な戦略のことで、野生動物や海獣類の狩猟、腐肉の入手、漁撈、貝類の採取、野生動物の採集と栽培、集約的な農耕、さまざまな動物の飼育・牧畜などの経済行為

この説明は、生業イコール食糧獲得の手段という内容を有していると解釈してよい。英語の subsistence に近い意味をもった説明であり、しばしば日本語の生業に与えられる「なりわい」とは性質を少し異にする。ただし、日本の考古学で比較的初期に生業という言葉を用いたのは、1950年代に八幡一郎が、弥生時代の稲作に関連させて使用したとされており、これは八幡が、渋沢敬三が設立したアチックミュージアムの活動に参加していたということもあって、他の考古学者にさきがけて、生業という用語をとり入れたということが指摘されている（甲元 2008: 30-31）。アチック・ミュージアムは民具研究とともに「なりわい」という課題にも取り組んでおり、八幡

は生業という言葉に少なからず親しんでいたということであろう。

一方、Subsistence に与えられる英語圏での一般的な説明は、例えば、オックスフォード英英辞典に従えば、次のような意味がつけられている。

the state of having just enough money or food to stay alive

これを直訳すると、「生存するために必要な金銭や食糧を有する状態」となる。ここで留意しておくことは、英文における subsistence には状況や状態を表す性質があるということである。すなわち、行為や行動を必ずしも示しておらず、日本語の一般的な生業が示すところの「なりわい」とは異なるニュアンスをもった言葉であることは否めない。

一方で、英語圏でも考古学の文脈で subsistence が用いられる場合には、食糧を獲得するための手段に類似した意味を多少なりとも含むようになるようである。例えば、英国の著名な考古学者であるコリン・レンフリーユと先史人類学者であるポール・バーンの共著“*Arcchaeology*” (1991) のなかでは、subsistence は ‘What Did They Eat? Subsistence and Diet’ という章の中でとりあげられ、食糧の獲得に関する課題であるとする以下のような記述がなされている。

The study of subsistence is one of the most technically developed fields of archaeology. Although the term sometimes includes fuel and clothing — 中略 — it is usually taken to mean the quest for food, documented almost everywhere by the waste products of food preparation, both plant and animals.

生業もしくは subsistence が文脈において性格を変えていく術語であることは、日本も英語圏も同じ状況のようであり、日本と少なくとも英語圏における考古学上の生業もしくは subsistence の有する課題は食糧の獲得におおむね帰着すると考えてよいであろう。

一方で、生業という言葉は漢字であることから、中国語圏における生業についてもふれておきたい。中国語では生業という言葉は一般的には用いられていない。『英漢大辞典』（第二版上海訳文出版社）で subsistence にあてられている訳語は哲学用語や宗教用語を除けば、次のようなものが挙げられている。

- (一) 活命、生存、維持生活
- (二) 頼以活命的東西：生計

(三) 存在、留存

二番目は生命を維持するための事象や事物をも含んでいることになることは興味深い。では、中国考古学では subsistence はどのように訳されているかという点、近年では生業という訳語があてられることが少なくない。中国考古学における生業の用語の使用が日本の考古学の影響を受けた逆輸入的なものかどうかを筆者は検証するだけの資料を持ち合わせてはいないが、subsistence 研究としての生業研究という翻訳には少なからず日本考古学の影響があったのかもしれない。

いずれにしても、生業研究は、英語圏で用いられる subsistence という生存のための経済活動としてとらえる視点と、集団をとりまく自然環境や社会的条件に適した暮らしのありかたを考える視点の両者が求められるのである。

参考文献

- Binford, L.
2001 *Constructing Frames of Reference: An Analytical Method for Archaeological Theory Building Using Ethnographic and Environmental Data Sets* Berkeley: University of California Press
- 岸上伸啓
2008 「文化人類学的生業論—極北地域の先住民による狩猟漁撈採集活動を中心に—」『国立民族学博物館研究報告』32(4): 529-578
- 甲元眞之
2008 「考古学による生業研究のあゆみ」『生業から見る日本史』（国立歴史民俗博物館編）pp.24-43, 東京：吉川弘文館
- 大村敬一
2009 「イヌイトは何になろうとしているのか？—カナダ・ヌナブト準州のIQ問題にみる先住民の未来—」『先住民とはだれか』（窪田幸子・野林厚志編）pp.155-178, 京都：世界思想社
- Oswalt, W. H.
1973 *Habitat and technology: The Evolution of Hunting* Holt, Rinehart and Winston
1976 *An Anthropological Analysis of Food- Getting Technology* New York: John Wiley & Sons Inc.
1983 [1976] 『食料獲得の技術誌』（加藤晋平他訳）東京：法政大学出版局
- Torrence, R.
1983 Time budgeting and hunter-gatherer technology. In P. Halstead and J. O'Shea (eds.), *Bad year economics: cultural responses to risk and uncertainty*, pp.11-22. Cambridge: Cambridge University Press

集団間の接触にともなう居住形態の変化 —中央アジアのカザフスタンの事例を中心に

藤本 透子

(国立民族学博物館)

1. はじめに

「パレオアジア文化史学」は、旧人と新人の「交替劇」を「文化史的観点から解析」する上で、「アジアにおける多様な環境への文化適応」と、「『交替劇』進展の速度や先住集団との接触、交流の程度などに多様なパターンがあった可能性」に着目している（西秋 2016:3）。このなかで B01 班は「新人定着期に生じた文化変化の解釈としてあり得たパターン」を提示するため、「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」を行うことを担当しており、中央アジアを対象とする 3 名（藤本、吉田、菊田）は、社会関係と物質文化の変化がどのように関わるのかを検討した。

現代における中央アジアは、主にカザフスタン、クルグズスタン、ウズベキスタン、タジキスタン、トルクメニスタンの 5 か国を中心とする地域をさしており、藤本はカザフスタン、吉田はクルグズスタン、菊田はウズベキスタンを担当した。具体的には、藤本と吉田はカザフ及びクルグズの定住化と居住形態の変化・家屋の変遷、菊田はタジクとウズベクの街区（マハッラ）や職人組織の変容と陶器生産について検討した。主な方法は、1) 文献調査、2) 国立民族学博物館での資料熟覧、3) 現地調査（村落部での人類学調査）である。2016 年度における現地調査は、カザフスタン北東部のパヴロダル州バヤナウル地区で藤本が行った。また、カザフスタン、モンゴルなどの総合博物館を訪問し考古学資料と民族学資料に関する知見を広めることにも努めた。

データはまだ整理・分析を行っている過程にあるが、これまでの研究をふまえた予備的な分析として、菊田は民博での B01 班の会合で「ウズベキスタン、リシトン陶業現代史—ものと人間の関係モデルに関連付けるには」と題して口頭発表し（2016 年 11 月 4 日）、藤本と吉田はパレオアジア文化史学第 1 回研究大会で「中央アジアにおける遊牧民の定住化—居住形態の変化を中心に」（2016 年 11 月 6 日）、藤本は第 2 回研究大会で「定住化にともなうカザフ村落社会の形成と変容」と題するポスター発

表を行った（2017 年 2 月 12 日）。本稿では、集団間の接触や交流を考えるにあたって、藤本が担当するカザフスタンの事例を中心に、定住化に伴って生じた社会変化と、居住形態、住居との関連について検討する。

2. 中央アジアにおける集団間の接触 —遊牧民・定住民関係

中央アジアの自然環境は全体的に乾燥しており、南部はオアシスが点在する地域で、東部にはアルタイ山脈や天山山脈があり、北部は草原（ステップ）が広がる。新人が西アジアから東アジアへと移動したルートは、ヒマラヤ山脈をはさんで「北廻り」と「南廻り」の 2 つが想定されているが、中央アジアはこのうち「北廻りルート」にあたる（西秋 2016:36）。ウズベキスタンでは、A.P. オクラドニコフによってネアンデルタール人骨が 1938-39 年という早い時期に発見されており、中央アジアに接する南シベリアのアルタイではデニソワ人が発見されている（加藤 2005:194, 長沼 2014:32, 2016:133）。しかし、アルタイ山脈やモンゴル、ウズベキスタンの複数の遺跡で約 10 万年前から 3 万年前まで石器文化の変化は連続的で、この地域に新人がどのように拡散しネアンデルタール人やデニソワ人といかなる関係をもったのかははっきりしていない（長沼 2014:35-37, 2016:133）。

当時の状況を推測するために、新人の社会における接触や交流とももの変化に関してモデルを構築することが B01 班の役割だが、旧人と新人が交替したとされる石器時代と現代を結びつけることには、当然のことながら困難がともなう。現代との有効な比較検討のためには、石器時代と現代を直結させるのではなく、そのあいだの時代についても概観し、歴史的な動態をふまえた上で、新人の行動パターンを分析する必要があるだろう。

歴史上、中央アジアの住民は、しばしば民族系統や生業が異なる集団が分離統合したり、相互に影響を与え合うなどの複雑な過程を経てきた。つまり、異なる集団間の接触や交流が頻繁に生じてきたのがこの地域である。

旧人と新人が共存し交替した時代における生業は狩猟採集であったが、新人は次第に農耕と牧畜を行うようになった。西アジアから中央ユーラシアに牧農複合が導入され、青銅器時代までは定住集落が営まれていたが、気候の乾燥化によって移動性の高い暮らしに適した草原が拡大し、青銅器時代の末、紀元前1000年頃から農耕を主体とする南方のオアシス定住民と、牧畜を主体とする北方草原地帯の遊牧民との分離が進んだとされる（林 2000：16-21）。つまり、異なる生業に従事する人々の集団が生まれたことになる。

それでは、定住民と遊牧民のあいだの関係はいかなるものであったのだろうか。中央アジアはシルクロードの東西交渉のイメージが強いが、オアシスの定住農耕民と草原の遊牧民との南北交渉も歴史的に重要な役割を果たしてきた（間野 1977：6-14）。オアシスに人口が集中する一方、草原は人口過疎で、それぞれの自然環境に適応した暮らしが営まれた。オアシスには都市が形成され、住民は日干しレンガ造りの家に住み、手工業や交易がさかんであり、都市近郊では小麦、綿花、果樹などが栽培された。草原では人々は天幕に暮らし、ヒツジ、ヤギ、ウシ、ウマ、ラクダなどの家畜を放牧し、移動性の高い生活が維持された。『遊牧民とその外部世界』を著した A.M. Khazanov によれば遊牧民は単独では存在しえず、穀物などの食料や絹などの奢侈品などを農耕民から調達する（Khazanov 1984）。ウマに乗るといふ技術によって成立した騎馬遊牧民は、その軍事力の優位を背景に時には略奪を行ったが、通常は絹馬貿易に見られるように交易により定住民から必需品を入手し、仲介交易を行う場合もあった。

この遊牧民と定住民の関係は、では、言語系統によって区別される諸民族とどのような対応関係にあるのだろうか。紀元前後には中央アジアの住民は、コーカソイドでイラン系の言語を話す人々であった（梅村 2000：91-95）。その後、モンゴル高原からテュルク系の言語を話す遊牧民（モンゴロイドの特質をもつ）が何世紀にもわたりたびたび中央アジアに侵入したことによって、住民の大部分は「テュルク化」、つまりテュルク系言語を話すようになった（濱田 2000：169-173）。オアシス都市の住民はイラン系・テュルク系言語のバイリンガルとなり、都市及びその周辺にはテュルク系遊牧民が定住し農耕などに従事するようになった。つまり、先住者は都市に住み続けたが移住者の言語に変わる傾向が見られ、移住者は言語を基本的に保持したがオアシスという自然環境に適応して生業や居住形態・住居が変化した。また、先住者のコーカソイドの特質は、部分的に今もオアシス都市の人々のあいだに受け継がれている。このように、遊牧民

と定住民がたんに隣り合って居住し接触を繰り返してきたのみならず、遊牧民が草原からオアシスに移動して定住する場合があります、言語、生業と居住形態、形質的特徴などの面でそれぞれ異なる変化が生じたことが分かる。

3. 遊牧民の定住化という現象

遊牧民の定住化には、1) 草原からオアシスへと移動して定住民となる、2) 草原から移動せずに定住化する、という2つの形態が区別される。1) は、前節でも指摘したように、前近代にしばしば生じたものである。移動してきた集団に着目すると、自然環境に適応して生業が変わったことになるし、同じ地域を年代順に観察すれば、異なる集団が到来したにもかかわらず元の集団の生活様式が新しい集団に受け継がれたことになる。16世紀末に始まるウズベクの定住化の事例などがこれにあたる。

2) の草原への定住化は、火器の発達により騎馬遊牧民の軍事的優位が崩れ、北から進出したロシア帝国の支配下に遊牧民が組み込まれたことにより生じた。19世紀後半から20世紀前半にかけてのクルグズやカザフの定住化がこれにあたる（e.g. 吉田 2004：88-97、藤本 2011：220-237）。カザフはもともと、ウズベク支配下から離れて草原で遊牧生活を継続した人びとであったが（堀川 2000：231）、20世紀前半までにその多くが定住化を余儀なくされた。オアシスに移動したのではなく、草原という同じ自然環境の下で遊牧から定住へと生活が変化したことになる。

このカザフの定住化の過程を、以下に具体的に検討していきたい。18世紀には現在のカザフスタン南部の冬営地から北部の夏営地まで約1,000キロ移動していたが、20世紀初頭には100～200キロと季節移動の距離は短くなった。その主な要因は、農耕を行うスラヴ系民族の大量入植であった。1890年代以降、ロシア・ウクライナ農民の草原への入植が本格化し、シベリア・中央アジア方面に入植した650万人の約3分の1、すなわち200万人以上がカザフ草原に入植したと推定され、1911年にはカザフスタン北部を中心とするステップ諸州¹⁾の人口の約40%がスラヴ系移民によって占められたと試算されている（中見・濱田・小松 2000：328）。スラヴ系住民の割合は地域によっても大きく異なっていたが、多くの場合はそれまでの遊牧ルートが寸断されて、長距離の季節移動は不可能となった。こうした状況の下、カザフ遊牧民の一部は夏季にも冬営地に留まって干草づくりに従事するようになっていった。

さらに、ソ連時代（1920～30年代）になると、政府によって定住化政策が強力に推進された。例えば、カザ

フスタン北東部のパヴロダル州バヤナウル地区では、1929年にコルホーズ（集団農場）が組織されて定住村落が形成された。このとき、約20の冬営地からカザフ遊牧民が集住してウントゥマク・コルホーズが形成されたことが、現在のウントゥマク村（仮名、写真1）の原型となった（藤本 2011:227）。準備不十分なまま強制的に進められた集団化・定住化は、社会に大きな混乱を引き起こし、カザフスタン全体で1930-33年には家畜頭数が約9分の1にまで減少し、大規模な飢餓によりカザフ人の人口の42%が失われたと推計されている（宇山 2005:518）。実際に、バヤナウル地区の人口は、1931年には50,079人（10,842世帯）であったが、翌1932年には30,570人（6,837世帯）に激減した（Aqibaev et al. 2001:177）。1945年のウントゥマク・コルホーズの世帯数は85で（Aqibaev et al. 2001:62）、地区全体の人口減少のなかで、定住村落に集住していった過程がうかがわれる。

家畜頭数と人口の関係については今後分析していく予定だが、集団化・定住化前の1917年の統計と集団化・定住化後の1945年の統計（Aqibaev et al. 2001:58, 62）を比較すると、統計の取り方に違いはあるものの、バヤナウル地区の家畜頭数は全体的に減少しており、1930年代の家畜頭数の激減からまだ完全には回復していないことが分かる。こうした状況の下で、20世紀半ばには牧畜に農耕を組み合わせた生業形態へと転換していったのである。家畜の種類に着目するとウシの増加がみられ、定住型の牧畜に移行したことが読み取れる。コルホーズの中心地にもうけられた定住村落は、飼料作物栽培や小麦栽培など、新たな技術が導入される起点となった。さらに、1950年代には複数のコルホーズがソフホーズ（国营農場）に統合されて、定住村落がますます行政・経済活動の中心となった。

バヤナウル地区では、1938年の地区人口の9.5%がロシア人やウクライナ人などで、カザフ人は約90%を占めていたが（Aqibaev et al. 2001:59）、1950年代に処女地開拓政策（カザフ草原で小麦を大規模栽培して増産する政策）がとられると、その要員としてロシア人を中心とするスラヴ系人口がさらに流入した²⁾。移住者であるロシア人は言語を変えず、先住者であるカザフがバイリンガルとなったことは、前節で述べたテュルク化の過程に似ている。しかし、さらに移住者は先住者の生業を変え、草原への農耕の導入や定住型の牧畜への移行をもたらした。バヤナウル地区の自然環境は農耕にあまり適しておらず、現在では小麦栽培は地区の一部を除き行われなくなっている。以上のように、19世紀以降の定住化は、オアシスへ移動したのではなく、草原に定住したという特徴をもつのである。

4. 住居の変化と村落社会

それでは、集団間の接触のなかで生じた定住化によって、物質文化はどのように変化したのであろうか。カザフの住居を例にとって検討すると、定住化に伴って天幕から木造ないしレンガ造りの家屋へと、住居は大きく変化した。カザフの天幕はキイズ・ウイ（*kiiz üy*, フェルトの家）と呼ばれ、木組みをフェルトで覆ったものである。木組みは、壁材と屋根材に大きく分けられ、移動時にはたたみ、移動先ですばやく組み立てることができる³⁾。天幕の側面（壁）と屋根部分には、別々にフェルトをかぶせる。天幕の中央には炉が設けられ、調理や暖房のために使われる。明かりとりと煙出しの役割を果たす天井部分の円形の木枠は、日中は開けておき、夜になると外側からフェルトで覆う。天幕は移動に適した家屋として、20世紀初頭まで大部分のカザフ人によって使われていた。

19世紀後半には、移住者であるロシア人などスラヴ系の人びとによって、バヤナウル地区の中心地に木造家屋が建てられた。また、カザフ人の有力者が、ロシア人から学んだ木造家屋を冬営地に建てるなどの変化も見られ始めた（Terletsky 2008:92-93, 藤本2011:71）。しかし、バヤナウル地区は一部に湖と森林がある以外は広大な草原であり、大量の木材は容易に手に入らない。このため、木造家屋は移住者であるスラヴ系やごく一部のカザフ人有力者が建設したにすぎなかった（写真2）。カザフ遊牧民の多くは天幕に居住し続けたのである。

バヤナウル地区でこうした状況が大きく変化したのは、ソ連時代に定住化が強制的に推進された後とみられる。定住村落には、中央アジア南部のオアシス地帯で主流である日干しレンガを使った家が多く建てられた。つまり、木造家屋のように移住者であるロシア人の住居をそのまま取り入れた例は少数で、自然環境に即した素材として日干しレンガが使われるようになったのである。ただし、オアシス地帯の住居は、外壁に囲まれ中庭に面して開かれたハウリと呼ばれる家屋が主であったが、草原に定住化したカザフにはハウリの形態は取り入れられなかった。定住化後も家屋のまわりに高い塀などは設けず、家屋と家屋のあいだには広い空間があることが多い。日干しレンガ造りの家屋は、壁の土台には石などが、天井部分には木材が使われる。1930年代には木製の天井の上に土を敷いて屋根としていたが、1950年代になると天井板の上に切妻屋根が設けられ、現在みられる定住家屋と同様の外観となった（写真3）。

1990年代以降になると、ソ連解体とカザフスタン独立後の市場経済化によって、新たな商品（素材）が市場にあふれたことが住居にも影響し、村落に二階建て住居が

登場して内装も変化した。つまり、新たな素材や技術の導入による変化が生じた。例えば、それまで壁の外側も内側も漆喰でぬり、客間の壁などには防寒と装飾を兼ねて絨毯をかけていたが、2000年代から村落部でも都市の住居のように壁紙を貼るようになった。また、天井もペンキを塗った木材ではなく、装飾性の高いパネル状の天井板をバザールから購入して使うようになった。詳しくは今後調査を進める予定だが、定住家屋自体が変化してきたのである。

それと並んで重要なのは、住居としては不要となったはずの天幕が、やや形状を変えながら、祝祭や大規模な儀礼において休憩や共食の場としてシンボリックに使われ始めたことである（写真4）。もともと遊牧民は、20世紀初頭まで夏季に大規模な儀礼を行って集まるなど、人口過疎な地域でコミュニケーションを図るためのシステムを発展させてきた。カザフはルウと呼ばれる父系クランへの帰属意識が強く、父系を遡って7世代以内に共通の祖先がいる場合は結婚しないという外婚制の規範があるが、例えば結婚祝いや有力者の1年忌（*as*, アス）には草原の各地から親族や姻戚などが集まった（藤本 2011: 80-83）。

定住化後も、カザフスタンの村落と村落、あるいは村落と都市はかなりの距離で隔てられており、ウントウマク村の場合、直線距離で隣村は11キロ、地区中心地は70キロ、州都は230キロあまり離れている。役場からの聞き取りに基づくと、都市への人口流出によりウントウマク村の人口は2005年には708人（139世帯）、2017年3月には635人（133世帯）と減少した。このように過疎化が進む地域で、儀礼は遠く離れた地域の人々を結び付けるコミュニケーションの場として重要である。人口密度が全体的に低く親族が広範囲に分散して暮らす状況の下で、結婚祝いや、前述の大規模な儀礼であるアスは、社会的紐帯の結節点となっている。

なお、現代においてアスが行われる場所のひとつとして墓地が重要である。墓地については稿を改めてくわしく論じる予定だが、20世紀初頭までの住居（天幕）の跡がほとんど残らないのに対し、墓地は石造りのため現在に至るまで残っている。カザフは土葬であり、20世紀初頭まで盛り土の上に石を置くのが一般的であった。有力者の場合のみ、石碑を建てたり、石造りの建造物などで墓を囲んだり覆ったりする習慣が見られた。1990年代以降、定住化以前の冬营地付近にある祖先の墓地に集まって上述のアスの儀礼を行うことで、出自と集団の意識が再確認されるようになってきているのである。

このように、カザフの定住化はスラヴ系の人々（特にロシア人）との接触のなかで生じ、住居は天幕から定住

家屋へと変化した。初期にはロシアの木造家屋の模倣が見られたが、自然環境により適した日干しレンガ造りの住居が主流となり、さらに、住居としては使われなくなった天幕が祝祭で象徴的な意味をもつという変化が生じたのである。

5. おわりに

集団間の接触による物質文化の変化のひとつとして、本稿では中央アジアのカザフの事例をとりあげ予備的な検討を行った。中央アジアの歴史を概観すると、言語系統と生業が異なる集団が接触する中で、言語が変化したり、生業が変化して定住化するという現象がしばしば生じていた。19世紀から20世紀にかけてのカザフの定住化も、歴史的に繰り返されてきたこうした現象のひとつとして捉えられる。

しかし、定住化が草原からオアシスへの移住にともなって生じたのではなく、草原に居住し続けながら定住型の牧畜へと移行したことが、近代以前の定住化とは異なっていた。その背景には、乗馬技術によって成立した騎馬遊牧民が火器の発達によって軍事的優位を保てなくなり、火器をたずさえて北方からロシア帝国が中央アジアへと拡大したことがあった。これにともなうスラヴ系の定住民の大量入植によって、カザフ遊牧民は次第に土地を奪われ定住化の傾向が生じた。さらにソ連の政策、すなわち権力による強制的な社会改革によって家畜頭数の激減が引き起こされ、飢餓により人口も減少するなかで、定住型の牧畜へと移行したのである。

定住村落は新たな技術が導入される拠点となり、定住化にともなって住居も天幕から固定家屋へと変化した。ロシアの木造家屋ではなく、気候にあった身近な材料として日干しレンガが使用された。集団の接触はすぐに物質文化の変化を生むわけではなく、両者の物質文化が共存する過程を経て、それまでとは異なる住居及び居住形態が作り出されたと見ることができる。また、天幕が住居としてはほとんど使われなくなったにもかかわらず、近年になって儀礼や祝祭で象徴的に使われるようになったことは、先住していた集団の物質文化がその社会的文脈を変化させながら受け継がれている例といえよう。

少なくとも新人の歴史に関して、ある集団が別の集団に完全に「交替」することはむしろ稀である。移住者の文化が完全に先住者の文化に置き換わったり、先住者の文化がそのまま移住者に受け継がれて連続することも部分的にはあるにせよ、全体としてみれば複雑な交流が生じた場合はるかに多い。本稿では中央アジアのカザフの住居を中心に検討を試みたが、どのような側面にいか

なる理由で変化が生じたのかを明らかにすることが、新人文化の形成の全体像を考える上で重要になってくるだろう。

注

- 1) 当時の行政区分であるステップ諸州には、現在のカザフスタン南部と南東部にあたる地域は含まれない。
- 2) 本稿では詳述しないが、ソ連解体後、ロシア人がカザフスタンからロシアに移出したことなどにより、人口に占めるカザフ人の割合が高まった。パヴロダル州バヤナウル地区に関しては、1999年国勢調査時の人口(32,985人)のうち、カザフ人は84.5%、ロシア人は10.0%、その他が5.5%である(Smailov 2001:35)。
- 3) カザフのキイズ・ウイとモンゴルのゲルには構造上の違いがある。ゲルの場合は中央に2本の柱を立てて天井の円形の木枠を支え、屋根材として使う木材はまっすぐである。これに対し、カザフのキイズ・ウイは中央に柱を設けず、屋根材の下部を湾曲させることで安定をよくしている。

参考文献

梅村坦 2000 「オアシス世界の展開」小松久男編『中央ユーラシア史』山川出版社、pp.89-142。
 宇山智彦 2005 「遊牧民の定住化 [旧ソ連地域]」小松久男ほか編『中央ユーラシアを知る事典』平凡社、p.517-518。
 加藤九祚 2005 「考古学」小松久男ほか編『中央ユーラシアを知る事典』平凡社、p.194-195。
 長沼正樹 2014 「ウズベキスタンの旧石器時代研究」西秋良宏

編『交代劇 考古資料に基づく旧人・新人の学習行動の実証的研究 A01 班 2013 年度研究報告書』4:32-40。
 長沼正樹 2016 「考古学から見た人類が活動の変化—旧石器時代の物質文化を中心に」(特集—人類の起源と進化)『現代思想』44(10):127-138。
 西秋良宏編 2016 『パレオアジア文化史学—アジア新人文化形成プロセスの総合的研究 第1回研究大会』(抄録集)。
 濱田正美 2000 「中央ユーラシアの『イスラーム化』と『テュルク化』」小松久男編『中央ユーラシア史』山川出版社、pp.143-173。
 林俊雄 2000 「草原世界の展開」小松久男編『中央ユーラシア史』山川出版社、pp.15-88。
 藤本透子 2011 『よみがえる死者儀礼—現代カザフのイスラーム復興』風響社。
 堀川徹 2000 「モンゴル帝国とティムール帝国」小松久男ほか編『中央ユーラシアを知る事典』山川出版社、pp.174-244。
 間野英二 1977 『中央アジアの歴史』講談社現代新書。
 吉田世津子 2004 『中央アジア農村の親族ネットワーク—クルグズスタン、経済移行の人類学的研究』平凡社。
 Aqibaev, R. M. et al. 2001 *Bayanaula*. Astana: Foliant.
 Khazanov, A. M. 1984 *Nomads and the Outside World*. Cambridge: Cambridge University Press.
 Smailov, A. A. ed. 2001 *Itogi perepisi naseleniya 1999 goda po Pavlodarskoi oblasti tom 2*. Almaty: Agenstvo Respubliki Kazakhstan po statistike.
 Terletsky, N. S. 2008 Vidy gorodov i aulov. Domostroeniya i kul'tovye sooruzheniya. In Sairov, Erlan ed. *Kazakhskaya traditsionnaya kul'tura v cobraniyakh Kunstkamery*. Almaty: Institut Kul'turnoi politiki i iskusstvoznaniya, pp.92-95.



写真1 草原の定住村落。カザフスタン北東部、バヴロダル州バヤナウル地区、2002年。



写真2 木造家屋。バヤナウル地区の中心地には、スラヴ系住民によって、あるいはスラヴ系住民から学んだカザフ人によって建てられたとみられる古い木造家屋が今も残る。2014年。



写真3 日干レンガ造りの定居家屋の増築。土台には石が使われている。日干レンガに泥を塗って漆喰で塗り固める。バヴロダル州バヤナウル地区、2014年。



写真4 祝祭で使われる天幕。バヴロダル州バヤナウル地区、2015年。

想像界の生物相

—生態系と人間の想像力の相関関係の比較文化的研究

山中 由里子

(国立民族学博物館)

これまでの研究

報告者は、国立民族学博物館において、共同研究「驚異と怪異—想像界の比較研究」をこれまで進めてきた。近世以前、ヨーロッパや中東においては、犬頭人、一角獣といった不可思議ではあるがこの世のどこかに実際に存在するかもしれない「驚異」は、空想として否定されるべきではない自然誌の知識の一部として語られた。また、東アジアにおいては、実際に体験された奇怪な現象や異様な物体を説明しようとする心の動きが、「怪異」を生み出した。共同研究は「驚異」と「怪異」をキーワードに、異境・異界をめぐる人間の心理と想像力の働き、言説と視覚表象物の関係、心象地理の変遷などを比較検討することを目的としている。

この共同研究のメンバーは、日本および中国の怪異を専門とする研究者と、中東およびヨーロッパの驚異を研究対象とする研究者から構成されており、それぞれの専門領域も文学、歴史学、民俗学、美術史などと多岐にわたる。これまで研究発表や議論を重ねる中で、互いが使用する用語の意味範囲や理解度のズレがより明確に意識されるようになってきた。例えば、日本の文脈だけみても、「妖怪」と「化物」は微妙に性質が違うものとして扱う必要があるのではないかという見解や、分析概念としての「自然(しぜん)」という用語と、近世日本の文献に登場する「自然(じねん)」(「自(おの)ずから然り」、つまり作為的ではない／ありのままという意味)という語を混同してはならないというような点を検証してきた。

また、本共同研究においては驚異と怪異の比較の際に、特定の文化特有の用語を、別の文化の現象を語る際に無批判に使うことに対して慎重な姿勢をとることを心がけている。例えば「イスラーム世界の妖怪」といった表現を安易に使うことはせず、各文化圏の関連語彙の変遷を時代ごとに博物誌、紀行文、地誌、伝承集などの一次資料に沿って丁寧に確認しつつ、比較のための共通理解の土台を作ろうとしてきた。

しかし、このように歴史的・文化的相対主義の視点か

ら、各時代や各地域の文脈において重要性を持つ概念を丁寧に比較検討する一方で、人類に普遍的な共通項を探らない限り、分野の境界を越えた共同研究をする意義はない。そのためには、「共通言語」が必要である。

「共通言語」としての認知科学

では、驚異と怪異を比較するための思考のプラットフォームをどこに求めればよいのか。そのヒントを、新学術領域研究「パレオアジア文化史学—アジア新人文化形成プロセスの総合的研究」(領域代表：西秋良宏)の研究班「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」(代表：野林厚志)に分担者として関わる中で得ることができた。当該プロジェクトにおいて先史考古学の専門家と交流しながら、ホモサピエンスがアフリカに誕生し、ユーラシア各地に拡散していった10万～5万年前に、人類にどのような「心の進化」が起こり、どのように新人独特の文化を形成していったのかということを考えるようになり、これまでよりさらにスケールの大きな時間の枠組みに驚異や怪異を位置づけるきっかけとなった。当初は視野になかった認知考古学や進化心理学の研究(Atran 1990, 2002; Boyer 1994; Mithen 1996; Sperber 1996)を参照しつつ、驚異や怪異に関する文化相対主義的な研究を、より普遍主義的な認知科学の成果に照らし合わせて捉えなおすことによって、人類に共通の行動や表象のパターンを見出せるのではないかと、という着想にいたったのである。

文化ごとに特有の心理システムがあるという考えのもとに立つ文化相対主義と、人類には進化の過程で得た共通の認知機能があるとする人類普遍主義は、相対立する立場の研究として捉えられがちである(Shore 1999)(図1)。

しかし、驚異や怪異をめぐる文化的な事象の基盤には、「驚く」・「怪しむ」という、常軌を逸した現象やモノに対する心理的反応があり、それらは普遍的で直観的な思考回路のプラットフォームに直結したものである。従って、何に対して、何故そう感じるのか、認知のメカニズムを



図 1

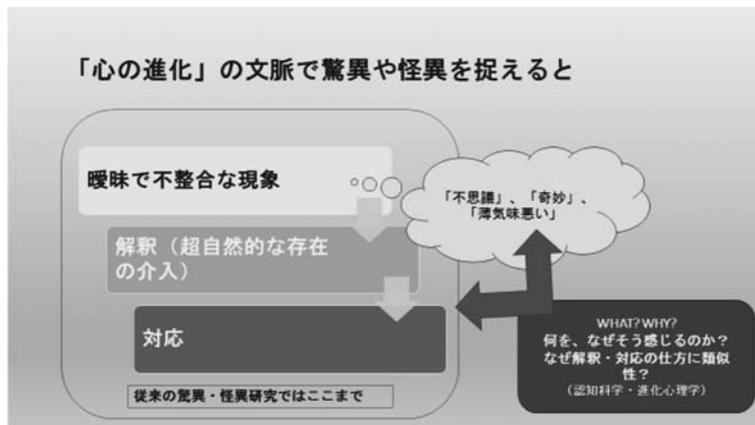


図 2

理解する必要がある。こうして「心の進化」の文脈で、驚異・怪異を捉えることによって、「曖昧で不整合な現象」に対する解釈や対応の仕方にどのような類似性があるのか明らかになり、従来の研究をより深化させることができる (図 2)。

自然界の直感的理解

人類には、進化の過程で備わった生得的な神経構造が「モジュール」ごとに独立してある、と認知科学者たちは言う (Fodor 1983; Hirschfeld and Gelman 1994; Sperber 1996: 119-150)。学習の影響を受けにくい、人間の脳に「配線済み」のそれらの思考回路は、認知する対象によって「直観生物学 (Intuitive Biology)」 (Atran 1990; Atran 1999)、「直観物理学 (Intuitive Physics)」 (Proffitt 1999)、「直観心理学 (Intuitive Psychology)」などと呼ばれる。Folk Biology, Naïve Biology, Commonsense Psychology といった分類名も使われてきた。さらに、これらのモデ

ジュール以外にも「直観社会学」、「直観数学」などがあるとされる (図 3)。

さらに人類は、直観生物学の思考回路から発生した「民俗分類学」Folk-taxonomy (Ethno-taxonomy とも) と呼ばれる博物学的分類の概念も共通して持っている、自然誌の認知科学的な基盤を明らかにしたアトランの研究は示す (Atran 1990)。

自然界の規則性から得られた生物や物理現象に対する直観的理解が進化の過程で人間の脳にプログラミングされているのだとしたら、そこから逸脱すると認識された、「あり得ない」生物や生理現象、あるいは「あり得ない」物理現象 (異常な音、光、モノの動き) に対する心理的反応が驚き・怪・不思議・不気味なのではないかと考えられる。我々が研究対象としている驚異や怪異をめぐる行動や表象は、この直観生物学や直観物理学に規定されるものなのである。

さらに民俗分類学に関するアトランの研究に照らし合わせると、自然界の規則性から人類が進化の過程におい

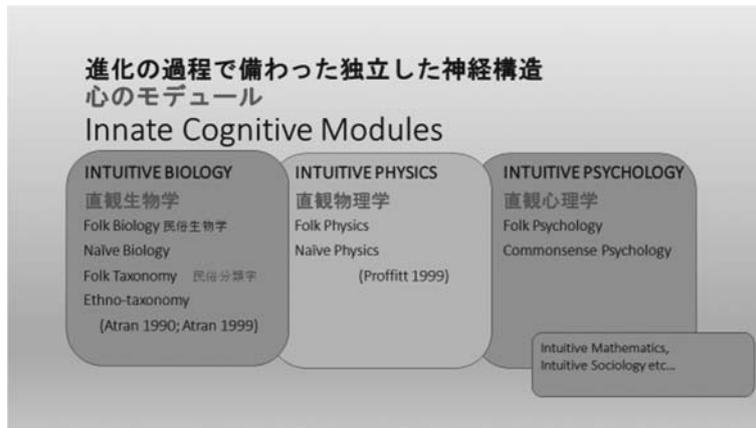


図 3

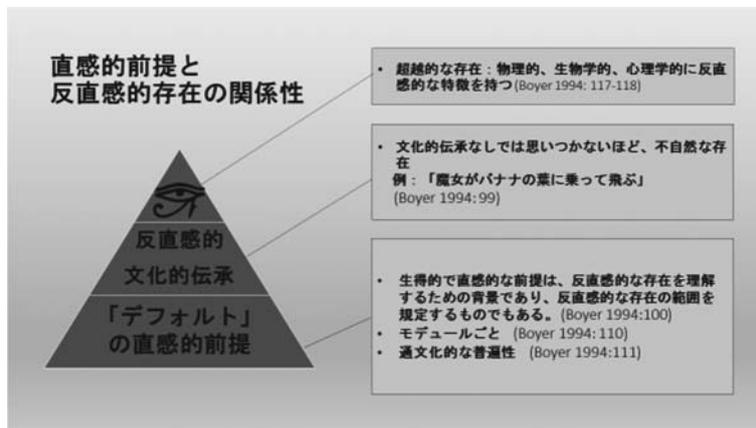


図 4

て築いてきた博物学的思考から逸脱する（がその存在を否定もできない）と認識されたものが驚異や怪異なのではないか、ということも指摘できる。不可思議な動植物や民族、鉱物、自然現象の描写が、ヨーロッパ・中東・漢字文化圏において共通して博物誌の文脈に組み込まれることが多いのも、この観点から説明可能ではないだろうか。これらの文化圏で書かれた博物誌の序文を比較分析すると、分類の規則性からはみ出すものや、分類を保留せざるを得ない未確認のものの存在をも否定せず、宇宙の秩序の中に位置づけようという心の動きは、確かに読み取ることができる（山中 2015: 11-20）。

超自然的存在と宗教

物理学的、生物学的、心理学的に反直感的（counter intuitive）な特徴を持つ非物質的存在——すなわち霊、神などの超自然的な存在——を想定する精神メカニズムを現生人類の特性とし、宗教の認知科学的な基盤を説明し

たボワイエ（英語読みでボイヤーと表記されることもある）の研究も、驚異や怪異を考えるにあたって注目に値する（Boyer 1994）。

ボワイエは、人間の脳に前述のようにモジュールごとにデフォルトで組み込まれている直感的前提と、その直観に反する特徴を持つ超越的な存在の関係性を次のように説明している。すなわち、反直感的な存在は、直感的前提（自然の直感的理解）を背景に把握されるものであり、その前提に規定されるもののため、その土台から大幅にはずれることはないのである。つまり人間の想像界は、この直感的前提をもとに構築されたものだということである。そして、反直感的な存在の表象は、あらゆる人間が自然に思いつくものではなく、文化的に伝承されるものであるとも述べている（図 4）。

さらにボワイエは、人類共通の生得的精神メカニズムと宗教的表象の類似性や反復性の関連性について論じている。彼によると、特定の宗教的表象が伝承され続ける認知的最適条件とは、想像力を刺激し、注意を喚起する

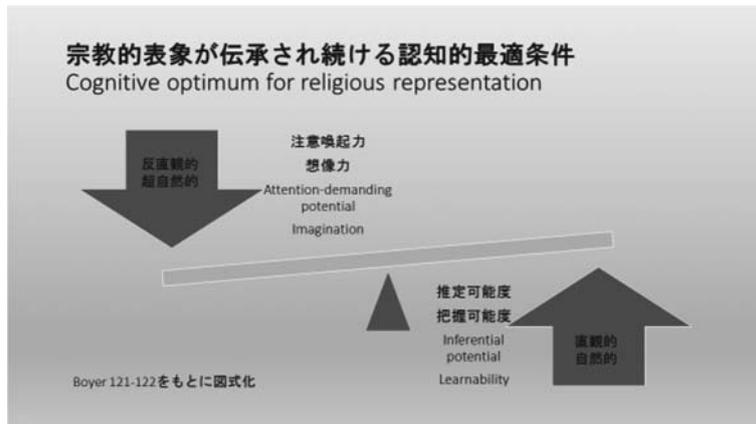


図 5

反直観的・超自然的要素と、推定可能度と把握可能度の高い直観的で自然的な要素がバランスよく結合している場合だという (図 5)。

反直観的な驚異や怪異の出現の背後に「神」、「気」、「天」といった、人間の通常感覚で知覚できない力の介在を見出す行動を理解する際に、ポワイエの理論を応用することが可能であろう。また、世界各地に見られる特定のモチーフ (例えば人魚といった半人半獣) の類似性、あるいは「伝承力」“transmittability”(ポワイエの言葉を使えば「反復性」)も、直観と反直観、自然と超自然の結合性、バランスという観点から説明できるかもしれない。

特定の表象の伝承力を考察する際には、スペルベルによる文化の伝承の疫学モデルも大変参考になる。スペルベルは病理学のアプローチを文化研究に当てはめ、広い地域に伝わったり、長期間にわたって維持されてきた文化的事象の「感染力」に注目する。彼が言うには通常の疫学においては、病原体が伝染する過程でどのように変容してゆくかが研究されるが、文化の伝承を感染と捉える場合は逆に、特定の表象に永続性があるのはなぜなのかという点が検証される (Sperber 1996:59)。また、この疫学モデルからアプローチすると、言語・信仰・技術などの種々の文化的な情報の潮流がカバーする範囲は一樣ではなく、むしろそれらは明確な境界などはない、密度に濃淡のある複数のゾーン (“zones of greater or lesser intensities”)としてみることができる (Sperber & Hirschfeld 1999:cxxvii)。これは、筆者がこれまでとなえてきた文学的なジャンルを「磁場」と捉える考え方とも重なって興味深い (山中 2015:8)。

今後は、具体的な文化的事象の比較分析をしながら、こうした認知科学の成果も応用し、共通性やパターンを見出す理論的な枠組みを構築してゆきたい。

参考文献：

- Atran, Scott. (1990). *Cognitive Foundations of Natural history: Towards an Anthropology of Science*. Cambridge, Cambridge University Press.
- . (1999). “Folk Biology.” *The MIT Encyclopedia of the Cognitive Sciences*. R. A. W. a. F. C. Keil. Cambridge, MIT Press: 317-319.
- . (2002). *In Gods We Trust: the Evolutionary Landscape of Religion*. Oxford, Oxford University Press.
- Boyer, Pascal. (1994). *The Naturalness of Religious Ideas: Outline of a Cognitive Theory of Religion*. Los Angeles, University of California Press.
- Fodor, J. A. (1983). *The Modularity of Mind*. Cambridge, Mass., MIT Press.
- Hirschfeld, L. A. and S. A. Gelman eds. (1994). *Mapping the Mind: Domain Specificity in Cognition and Culture*. New York, Cambridge University Press.
- Mithen, Steven. (1996). *The Prehistory of the Mind: a Search for the Origins of Art, Religion and Science*. London, Thames and Hudson (ミズン [マイズン] スティーヴン 1998 『心の先史時代』松浦俊輔・牧野美佐緒訳, 青土社)。
- Proffitt, D. (1999). “Naive Physics.” *The MIT Encyclopedia of the Cognitive Sciences*. R. A. W. a. F. C. Keil. Cambridge, MIT Press: 577-579.
- Shore, B. (1999). “Cultural Relativism.” *The MIT Encyclopedia of the Cognitive Sciences*. R. A. W. a. F. C. Keil. Cambridge, MIT Press: 213-215.
- Sperber, Dan. (1996). *Explaining Culture: A Naturalistic Approach*. Oxford, Blackwell (スペルベル, ダン 2001 『表象は感染する—文化への自然主義的アプローチ』菅野盾樹訳, 新曜社)。
- Sperber, D. and L. A. Hirschfeld. (1999). “Culture, Cognition, and Evolution.” *The MIT Encyclopedia of the Cognitive Sciences*. R. A. W. a. F. C. Keil. Cambridge, MIT Press: cxi-cxxxii.
- 山中由里子 (2016) 「既知の世界の彼方へ」『民博通信』152: 20-21。
- 山中由里子編 (2015) 『〈驚異〉の文化史—中東とヨーロッパを中心に』名古屋大学出版会。

〈調査概報〉

オーストラリア大陸への現生人類の移動と適応

— 現地調査報告概報 —

大 西 秀 之

(同志社女子大学)

1. 本調査の目的

2017年1月3日から9日の期間オーストラリアにおいて、同大陸における現生人類の移住と適応をテーマとした資料調査を実施した。この調査では、シドニーとキャンベラに位置する博物館・研究施設を訪問し、予備的調査として展示収蔵資料を見学するとともに情報収集を行った。なお現地調査では、オーストラリア国立大学で在外研究をされていたA02班の小野林太郎（東海大学・海洋文学部・准教授）氏に御助力・御教示をいただいた。

現地調査の報告に先立ち、まず本研究プロジェクトにとって、オーストラリア大陸への人類の移動と適応を追究する研究意義を提示する。オーストラリア大陸への人類の拡散と到達は、同大陸南東部に位置するマンゴⅢ遺

跡（図1-1）の考古学遺物の分析から、4万年前（から6万8000年前の間）というC14データが提示されている。また同遺跡からは、埋葬人骨が発掘されているが、その遺伝的特徴はホモ・サピエンスであり現在のアボリジニに系譜が繋がることが指摘されている。この結果は、古人骨のミトコンドリアDNAから導き出されたものであることから、オーストラリア大陸においても現生人類のアフリカ起源説＝一元説が裏づけられたといえる。

この他、オーストラリア大陸周辺地域では、まず同大陸北部のアーネムランドで5万2000年前に遡る遺跡（図1-2）が、またニューギニア島北東部ヒュリオン半島で4万5000年前の遺跡（図1-3）が、それぞれ確認されている。またニア・オセアニアと呼称される島嶼部でも、更新世期の遺跡が発見されている。たとえば、ニューブリテン島のヨンボン遺跡とニューアイルランド島のマテンクプクム遺跡では、3万5000年前の年代測定がしめされている。さらにはソロモン諸島のブカ島でも、2万9000年前の遺跡が確認されている。

こうしたオーストラリア大陸と周辺部の遺跡は、現生人類の拡散を考える上でも重要な課題と関連している。第一にあげられるのが、現生人類が出アフリカを果たして間もない時期に、どのようなルートを通りオーストラリア大陸にまで到達していたか、という問いである。これに対しては、アフリカ東端の紅海沿岸からアラビア半島南端を直進し、インド亜大陸から東南アジア大陸部（スンダランド）の沿岸部を抜け、オーストラリア大陸（サフル大陸）に至る、「スーパーハイウェイ」を通ったという仮説が提示されている（図2）。

次の課題は、このオーストラリア大陸の到達時期が、ステイブン・マイズンによって提起されたいわゆる「文化のビックバン」と一致することから、その正否を検証しうる可能性である。というのは、6万年前に現生人類は、生物学的・解剖学的には変化していないものの、その認知能力が飛躍的に変容したゆえに急激に文化を発展させ、出アフリカを果たしオーストラリア大陸にも到達しえた、という可能性である。



図1：関連遺跡

最後の課題は、人類の海洋適応の追究である。当時のオーストラリアは、最終氷期の海面低下によりニューギニアと陸続きとなった「サフル大陸」を形成し、また東南アジア大陸部も「スンダランド」という現在よりも遙かに巨大な陸域であった。とはいえ、スンダランドからサフル大陸は、陸続きではなく海によって隔てられていたため、どうしても移住のためには造船や航海などの海洋適応技術が必要であった。もっとも、現生人類がスーパーハイウェイを通過していたのであれば、スタート地点でアフリカ大陸からアラビア半島に行くためには、海を渡る必要がある。このため、こうした海洋適応を、人類が何時、何処で、どう開発したのか、という問いは人類史にとっても重要な意義を孕んだものといえよう。

ところで、上記の三つの課題は、個別のものではなく、相互に関連した一連の現象と見なすべきである。すなわち、現生人類であるホモ・サピエンスは、6万年前に出アフリカを果たし新たな環境に進出・適応するための技術革新を実現していたが、そのなかに海洋適応も含まれており、それゆえ短期間でサフル大陸やニア・オセアニアにまで到達することができた、というストーリーとしてまとめる事ができる。またこれは、ホモ・サピエンスの適応能力を探る重要な切り口となることは論ずるまでもない。

以上のような課題を踏まえたとき、民族誌モデルを担当する B01 班として採りうるアプローチは、スンダランドからサフル大陸に移住した現生人類が、どのような海洋適応の技術を有していたか、その自然環境と民族誌データから復元を試みることがあげられる。というのも、まず移住ルートに関しては考古資料などの分析に委ねざるをえず、また認知能力に関しては具体的事例から遡及せざるをえないからである。換言するならば、海洋適応のあり方を明らかにすることは、移住ルートの成否や認知能力の飛躍を検証することにダイレクトに繋がっているといえる。こうした射程の下、本調査では、オーストラリア先住民の海洋に適応にかかわる生業技術や最終

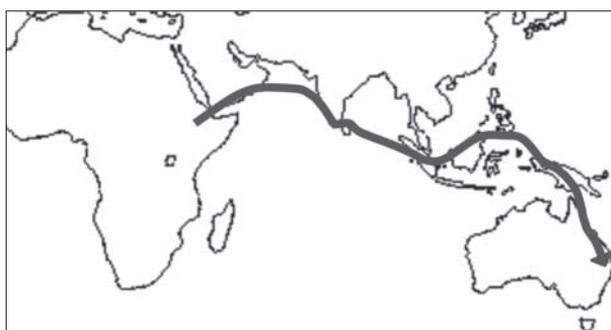


図2：ユーラシア大陸沿岸南端部のスーパーハイウェイ

氷期における同地域の古環境などに関する、基礎的な知識や理解を得ることを目的として実施した。

2. オーストラリア博物館調査概要

現地調査では、まずシドニーのオーストラリア博物館の展示資料を見学した。同館は1827年に開設された、オーストラリア最古の公共博物館であり、自然から歴史・文化までが展示された総合博物館である(図3)。また同館は、オーストラリア国内でも有数のコレクションを誇ることに加え、オーストラリア先住民の専用展示コーナーが設けられている。このため、オーストラリア博物館



図3：オーストラリア博物館と先住民展示

の訪問は、今回の調査にとってメインに位置づけられるものとなる。

わたし個人の経験としては、2度目の訪問であったが、今回は前述のような研究プロジェクトに関連する目的の下、改めてオーストラリア博物館の全展示を見学した。なお可能であれば、収蔵庫の資料も見学することを希望していたが、訪問時に閉鎖されていたため、残念ながら実現することができなかった。ただ今回は、小野林太郎氏と一緒に見学を行い、意見交換を行ったことに加え、同館の上級研究員でニューギニア島をはじめオセアニア先史考古学の重鎮である Jim Spect 博士に面会し、その案内の下に見学することができた。またそこでは、本調査に関する問題の質疑を含めさまざまな意見交換を行った。このため、オーストラリア博物館での調査は、非常に実りの多いものとなった。

具体的な調査内容としては、まず自然史の展示コーナーにおいて、オーストラリア大陸に人類が到達した際に生息していた哺乳類をはじめとして当該期の生態環境の概要を把握することができた。もっとも、ここで得た情報のほとんどは既知の内容であったため、さほど目新しい発見はなかった。むしろ、生態環境を支える地質学的基盤のなかに、本プロジェクトに関連する重要な視座

を得ることができた。なかでも、同大陸は、 Gondwana 大陸から分離されて以降、造山運動などの地形の変動が生起していないため、長期間の侵食作用が進んでいること、またそれゆえ気候的要因のみならず地質学的要因からも、植生の発達に制約が掛かっていることが確認できた。このことは、たとえ気候変動によって温暖化したとしても、オーストラリア大陸は、移住元であるスダラランドを形成していた東南アジア大陸部や、海面低下によってサフル大陸として一体化していたニューギニア島とは異なり、熱帯雨林などの生態環境が形成されなかったことを意味する。この理解は、同大陸における現生人類の移住と適応を考察する上で、重要な視座になると予想される。

いっぽう、オーストラリア先住民の文化や歴史に関する展示に関しては、豊富な民具資料や民族誌資料に比して、考古資料の展示はほとんど皆無に等しい状態だった。Spect 博士の言によれば、これは先住民に対する配慮というよりは、来館者の需要に対応した結果とのことであった。また余談ながら、近年、オーストラリアでも学術研究に対する予算配分が削減されており、ますます博物館側は来館者の需要を無視できなくなっているようであった。これに対して、民具・民族誌資料の展示は、質量ともに非常に豊富であったが、マイノリティとしての先住民の文化や現在の社会状況を伝えることを主要な目的として構成されているため、文化史あるいは社会啓発的な内容が中心であった。このため、同館の展示は、前述した考古資料の不足も相まって、オーストラリア先住民を人類史的な文脈に位置づけ理解できる内容・構成となっていなかった。むしろ、こうした展示内容・構成は、過去から現在まで先住民のびとが置かれてきた政治社会的状況に配慮した結果にほかならない。

以上のような展示資料の見学を通して、さまざまな意見交換を行ったが、その概略をまとめるならば、おおよそ海洋適応に関するトピックに収斂できる。まず、オーストラリア先住民の海洋適応に関しては、現在までの部分的に情報は得られるものの、ほとんどが漁撈など生業活動に関するものに限定されることが確認できた(図4)。同先住民のイメージとしては、一般に乾燥地帯における狩猟採集がクローズアップされる傾向にあるため、こうした海浜部での生業活動に関するデータを整理することは一定の意義が認められる。

しかしながら、民具資料や民族誌データに基づき、スダラランドからサフル大陸に移動した海洋航海にアプローチするためには、質的にも量的にも十分な検討材料・データがないことから極めて困難である。というのも、オーストラリア先住民は、ヨーロッパ人の入植以後、ま

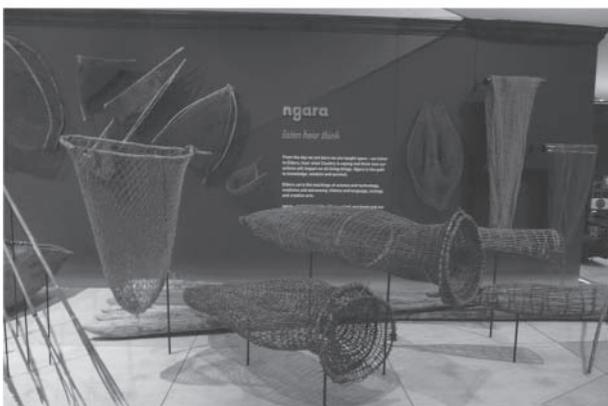
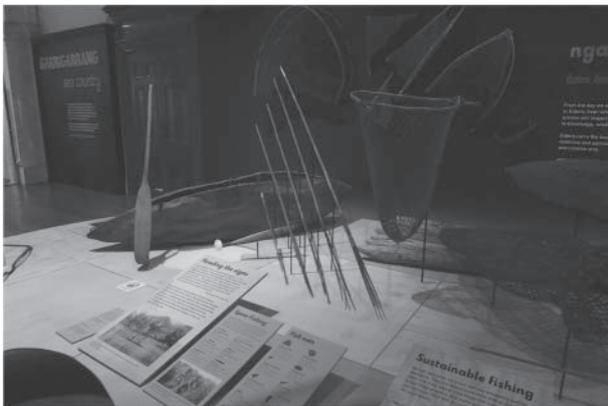


図4：オーストラリア先住民の漁撈具

ず居住に適した沿岸部から故地を追われていったため、その資料やデータが内陸部に比べはるかに残されていないからである。これに加え、沿岸部のオーストラリア先住民の海洋適応に関しては、そのものの歴史的変容はいうまでもなく、ヨーロッパ人の入植以前にも東南アジア島嶼部などとの接触・交流を通して帆船などを知っていたことが指摘できる。こうした内的・外的要因を考慮する限り、現在得られている民具資料や民族誌データなどからアプローチするためには、まず現在と過去の実環境データを比較した上で、そのアダプタビリティがどこまで遡及できるかなどを、基礎的作業として行うことが必須となるだろう。

こうした民具資料や民族誌データの限界を確認した反面、小野氏や Spect 氏との意見交換から、オーストラリア大陸への移住・適応に関する、非常に興味深い先史考古学的な知見を得ることができた(図5)。その一つが、最終氷期後の海面上昇によってサフル大陸やスンダランドが消滅し、完全に分離されたオーストラリア大陸側は、移住元と自然環境が大きく異なるため孤立化が深まった、という可能性である。たとえば、サフル大陸やスンダランドが存在している時期は、陸域が隣接していることもあり往来があったと推測できるが、分離後は植生などの自然環境が異なるため、もし仮に造船や航海といった技術を維持していたとしても、肝心の——可能性が想定されている——「竹筏」などを造る素材がないため、故地に戻ることが困難になったのではないかと、という想定が提起できる。もっとも、航海に関しても、海面上昇後は格段に渡海距離が増すため、既存の知識や技術では対応できなくなっていた可能性が高い。このため、オーストラリア大陸の移住・適応は、むしろ巨視的な時間で捉えるならば片道切符の航海であった、との仮説を導くこともできる。であれば、オーストラリア先住民の文化複合の読み解きも異なるものとなる。



図5：小野氏と Spect 博士の意見交換

上記の理解との関連で、いま一つ課題となったのが、サフル大陸への移住のための海洋適応が生み出された場所である。サフル大陸への移住が、人類史上で最初の「大航海」と認識することに疑いの余地はない。しかし、そのための海洋適応が、現在の東南アジア大陸部に当たるスンダランド側で開発されたものなのか、それともスンダランド到達以前に既に完成されていたのか、という疑問はホモ・サピエンスの拡散を考える上でも重要なトピックとなる。というのも、近年の調査研究によって、アフリカ東部の紅海沿岸で海浜資源の利用が開始されていたこと、またそこからアラビア半島南端にダイレクトに渡海した可能性が指摘されているためである。さらに、現生人類の出アフリカ後、極めて短期間でオーストラリア大陸に到達していることから、その移住ルートはユーラシア大陸南端の沿岸部であった可能性も指摘されている。これらを考慮するならば、むしろ海洋適応は、出アフリカ前に準備されており、それゆえ非常に短期間のうちにユーラシア大陸南端の沿岸部沿いに拡散し、スンダランドからサフル大陸に到達できた、との想定も可能となる。したがって、これらのルート上の民族誌データを検討することも、本プロジェクトにとって必要な視点となりうる。

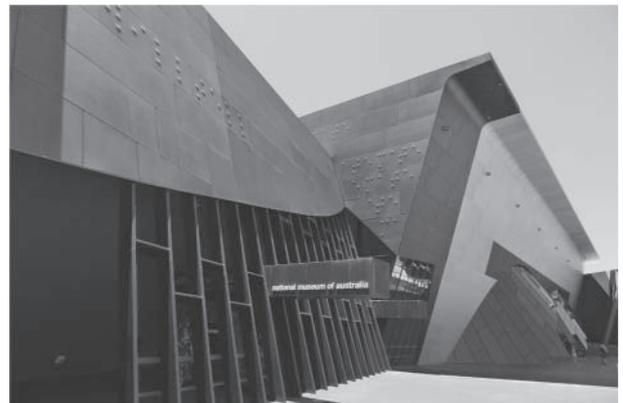


図6：オーストラリア国立博物館と先住民展示

3. オーストラリア国立博物館の調査概要

シドニーでは、オーストラリア博物館以外にも複数の博物館で先住民に関する資料調査を行ったが、それらは美術系の展示内容・構成であったため、本プロジェクトにとって直接的関連するものではなかったため割愛する。その後、キャンベラに移動し、そこでも複数の博物館・研究機関で資料調査を行った。とくに、小野氏が在外研究で滞在されているオーストラリア国立大学では、同氏の発掘資料を見学させていただくことができた。それらの経験は、直接的にも間接的にも、本プロジェクトに寄与しうるものであったが、先史考古学的な調査研究に基づく内容であるため、以下ではオーストラリア国立博物館の調査成果を提示する。

オーストラリア国立博物館は、1980年に開設された比較的新しい博物館である（図6）。また同館も、シドニーのオーストラリア博物館と同じく、自然から歴史・文化まで展示された総合博物館である。ここでも、オーストラリア先住民の展示コーナーが特設されており、近年リニューアルが行われた。同館の展示も、先住民の呼びとが置かれた政治社会的状況に相当な配慮を払ったものであったが、地域ごとに民具資料や民族誌データが展示されていた。このため、具体的に沿岸部の情報を把握することができた。

とはいえ、上記のような違いがあったものの、オーストラリア先住民の民具資料や民族誌データから得られた海洋適応に関する情報は、基本的にオーストラリア博物館の見解をなぞるものであった。ただそのなかにあつて、非常に興味深い資料が認められた。それは、オーストラリア大陸にヨーロッパ移民が到来して以降、いわゆる民族誌時代に先住民が製作した押捺剥離によって製作された尖頭器である。これらの資料のなかには、自然石のみならず、ヨーロッパ人が持ち込んだガラス製品を素材として再加工したものが多数確認できた（図7）。

上記のような資料は、石器製作を検討する上で示唆に富むものであるが、オーストラリア先住民の移住・適応に関してもユニークな視座を提示する。というのも、同大陸の遺跡から出土の考古資料のなかには、こうした押捺剥離による精巧な両面体の尖頭器が明確に得られているわけではないからである。くわえて、東南アジア大陸部でも、同様な資料の出事例は、旧石器時代以降ほとんど確認されていない。むしろ、その形態的特徴は、ユーラシア大陸北部の後期旧石器時代の出土資料に類似している。

とすれば、オーストラリア先住民は、その製作技術を何時、どのように習得したか、という問いが湧いてくる。

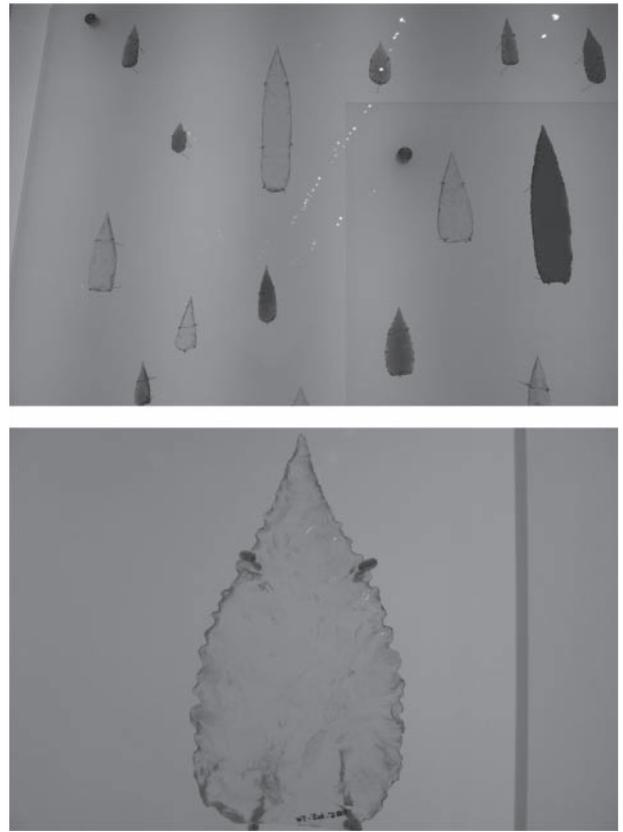


図7：オーストラリア先住民のガラス製尖頭器

さらに、この問いは、単に技術習得の時期や起源を明らかにする以上の問題に繋がっている。それは、仮に技術習得の時期や起源が明らかとなったとしても、それをオーストラリア先住民が——先史時代の当初になかった可能性が高いにもかかわらず——受け入れる技術基盤を有していたことになるからである。さらに、もし外部から取り入れられたケースでなかった場合、より興味深いトピックとなる。すなわち、出土資料では確認できていないが、サフル大陸に移住した現生人類のグループは、押捺剥離によって精巧な両面体尖頭器を製作する——あるいはその後にイノベートしうる——技術的な潜在能力を保持していたこととなる。いずれにせよ、こうした想定は、現生人類の技術体系や学習能力の追究に繋がるものといえるだろう。

またその追究は、民具資料や民族誌データからアプローチできる可能性がある。というのも、外部社会との接触や新たな環境に対応するため、技術的イノベーションが生じた事例やデータが少なからず世界中で収集されているからである。それらを丹念に検討すれば、オーストラリア先住民の尖頭器製作から提示された、現生人類の技術能力に関する課題をクリアーする糸口となるだろう。

以上のように、今回の調査では、オーストラリア大陸への現生人類の移住や適応を追究するために、民具資料や民族誌データに基づくアプローチが、どのような貢献を果たしうるか検討を試みた。その結果、限定された地域や集団に関する個別具体的なトピックのみならず、人類史的な課題に対しても寄与しうる可能性が確認できた。

またそれは、個別具体的な地域・集団のトピックの解明にも、直接的・間接的に繋がるものでもあった。このような視座は、本プロジェクトの調査研究を推進するなかで、今後少しずつ検討して行きたいと考えている。そういった意味で、今回の調査は、非常に有意義な経験となったと評価できる。

2016 年度の計画研究 B01 班全体での研究活動

1. B01 班研究会合

(1) 第 1 回研究会合

開催日 2016 年 7 月 27 日 (水)

開催場所 国立民族学博物館 第 3 演習室

- 1) 計画研究 B01 班の研究計画全体と研究分担者、連携研究者の役割分担、各個研究との関係の検討。

- 2) 各研究者による研究計画レビュー

野林厚志「パレオアジア B01 班の研究課題の仮原案」

池谷和信「狩猟採集民と隣人との関係をめぐる文化理論——物質文化に注目して——」

藤本透子「中央アジアにおける遊牧民の定住化と物質文化の変容」

卯田宗平「琵琶湖における外来資源と漁師たちの技術展開」

(2) 第 2 回研究会合

開催日 2016 年 11 月 4 日 (金)

開催場所 国立民族学博物館 第 3 演習室

菊田悠 (北海道大学)「ウズベキスタン、リシトン陶業現代史：ものと人間の関係モデルに関連付けるには」

(3) 第 3 回研究会合

開催日 2017 年 2 月 3 日 (金)

開催場所 国立民族学博物館 第 3 演習室

- 1) プロジェクト研究員の推薦選考
- 2) 2016 年度研究成果のとりまとめ
- 3) 来年度の研究計画

2. 領域全体の研究会等

(1) 領域計画研究班合同会議

開催日 2016 年 9 月 14 日 (水)

開催場所 名古屋大学 博物館講義室

野林厚志

口頭発表「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学モデル」

(2) B01—B02 班合同班会議

開催日 2016 年 10 月 31 日 (水)

開催場所 国立民族学博物館 第 3 演習室

若野友一郎・青木健一 (B02)「新人の拡散と定着：個体群・文化の複合ダイナミクスモデル」

野林厚志・丸川雄三 (B01)「生態資源獲得の道具と技巧の人類学的研究」

小林豊 (B02)「種間文化伝達および文化多様性に関する理論研究」

化野燐 (B01・研究協力者)「奇」のデータベース——例外的現象をどう整理するか——

上羽陽子・金谷美和・中谷文美 (B01)「南アジアにおける糸素材および織機の技術民族誌的研究」

青木健一 (B02)「集団サイズと文化水準の無相関について」

藤本透子 (B01)「中央アジアにおける遊牧民の定住化——カザフの居住形態の変化を中心に」

高畑尚之 (B02)「ゲノムに基づく種間又は種内集団間の分岐年代と繁殖個体数の推定に関する

大西秀之 (B01)「北東アジア地域における多文化集団の接触・交流状況」

(3) 領域研究大会

1) 「パレオアジア文化史学」第 1 回研究大会

開催日 2016 年 11 月 5 日—11 月 6 日

開催場所 東京大学本郷キャンパス 大学院理学系研究科・理学部 小柴ホール

*発表等については業績一覧を参照

2) 「パレオアジア文化史学」第 2 回研究大会

開催日 2016 年 2 月 10 日—2 月 11 日

開催場所 名古屋大学 野依記念学術交流館

*発表等については業績一覧を参照

3. 関連業績一覧

【図書】

池谷和信編著 (2017)『ビーズ』吹田：国立民族学博物館。

池谷和信編著 (2017)『狩猟採集民からみた地球環境史——自然・隣人・文明との共生』東京：東京大学出版会。

Ikeya, K. et al. eds. (2017) *Hunter-Gatherers and their Neighbors in Asia, Africa, and South America* (Senri

Ethnological Studies 94) Suita: National Museum of Ethnology, Japan.

Peng, Y. (2017) *Inscribing the Body: An Anthropological Study on the Tattoo Practice among the Baka Hunter-Gatherers in Southeastern Cameroon*. Kyoto: Shokado.

【雑誌論文】

卯田宗平 (2016) 「鵜飼い漁誕生の初期条件——野生ウミウを飼い馴らす技術の事例から」『日本民俗学』286: 35-65。

【図書掲載論文】

池谷和信 (2017) 「狩猟採集民からみた地球環境史」『狩猟採集民からみた地球環境史——自然・隣人・文明との共生』池谷和信編: 1-21、東京大学出版会。

池谷和信 (2017) 「地球の先住者から学ぶこと」『狩猟採集民からみた地球環境史——自然・隣人・文明との共生』池谷和信編: 297-302、東京大学出版会。

山中由里子 (2017) 「捏造された人魚——イカサマ商売とその源泉をさぐる」『海賊史観からみた世界史の再構築——公益と情報流通の現在を問い直す』稲賀繁美編: 170-195、思文閣。

山中由里子 (2017) 「スエズの商人・南部憲一」『欧州航路の文化誌 寄港地を読み解く』橋本順光・鈴木禎宏編: pp.139-158、青弓社。

Ikeya, K. and Robert K. Hitchcock (2016) Introduction. In *Hunter-Gatherers and their Neighbors in Asia, Africa, and South America (Senri Ethnological Studies 94)*, edited by K. Ikeya and Robert K. Hitchcock, pp.1-15, Osaka: National Museum of Ethnology, Japan.

Ikeya, K. (2016) Interaction of the San, NGOs, Companies, and the State. In *Hunter-Gatherers and their Neighbors in Asia, Africa, and South America (Senri Ethnological Studies 94)*, edited by K. Ikeya and Robert K. Hitchcock, pp.255-267, Osaka: National Museum of Ethnology.

Nakai S. and K. Ikeya (2016) Structure and Social Composition of Hunter-Gatherer Camps: Have the Mlabri Settled Permanently? In *Hunter-Gatherers and their Neighbors in Asia, Africa, and South America (Senri Ethnological Studies 94)*, edited by K. Ikeya and Robert K. Hitchcock, pp.123-138, Osaka: National Museum of Ethnology.

池谷和信 (2016) 「近年における歴史生態学の展開」『環

境に挑む歴史学』水島司編: 43-54、勉誠出版。

【主宰したシンポジウム、パネル、ワークショップ】

野林厚志 (2016) 『台湾資訊跨國多語言交流平台』屏東: 原住民族委員會原住民族文化發展中心、台湾。2016年11月26日。

Ikeya, K. and Sakkarin Na Nan. (2016) Symposium: Interactions between Prehistoric Hunter-Gatherers and Neighbors in Asia. *WAC (World Archaeological Congress)-8 Kyoto*, Doshisha University, Kyoto, Japan, September, 2016.

【講演・学会発表等】

Yamanaka, Y. (2017) Incredible India, the Land of Wonders in Persian 'Ajā'ib Literature. *International Conference on Indo-Persian Studies at the Academy of Persian Language and Literature*, Tehran, Iran, February 20, 2017.

Nobayashi, A. (2017) Size of hunting area and the techniques of hunter-gatherer groups for hunting games using ethnographic data. *The 2nd Conference on Cultural History of PaleoAsia*, Nagoya University, Tokyo, February 10-12, 2017 (Proceedings, p.11). Nagoya University, Chikusa. 野林厚志 (2017) 「民族誌データにもとづく狩猟採集民の狩猟域の大きさと動物獲得の技術」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020: パレオアジア文化史学第2回研究大会』名古屋大学野依記念学術交流館、2017年2月12日 (予稿集10頁)

上羽陽子・金谷美和・中谷文美 (2017) 「紐と糸をめぐる技術民族誌的研究」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020: パレオアジア文化史学第2回研究大会』名古屋大学野依記念学術交流館、2017年2月12日 (予稿集60頁)。Ueba, Y., Kanetani, M. and Nakatani, A (2017) Ethnographic analysis of technologies for making and using thread, string and yarn. *The 2nd Conference on Cultural History of PaleoAsia*, Nagoya University Museum, February 12, 2017 (Proceedings, p.61).

大西秀之 (2017) 「産業社会以前における手工芸技術の学習に関する民族誌モデル」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020: パレオアジア文化史学第2回研究大会』名古屋大学野依記念学術交流館、2017年2月12日 (予稿集58頁)。Hideyuki Onishi (2017) Ethnographic model on learning of handicraft technologies in pre-industrial societies. *The 2nd*

- Conference on Cultural History of PaleoAsia*, Nagoya University Museum, February 12, 2017 (Proceedings, p.59).
- 池谷和信 (2017) 「狩猟採集民と農耕民との相互関係の動態」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020 : パレオアジア文化史学第 2 回研究大会』名古屋大学野依記念学術交流館、2017 年 2 月 12 日 (予稿集 62 頁)。Ikeya, K. (2017) Dynamic relationship between hunter-gatherers and farmers. *The 2nd Conference on Cultural History of PaleoAsia*, Nagoya University Museum, February 12, 2017 (Proceedings, p.63).
- 藤本透子 (2017) 「定住化にともなうカザフ村落社会の形成と変容」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020 : パレオアジア文化史学第 2 回研究大会』名古屋大学野依記念学術交流館、2017 年 2 月 12 日 (予稿集 64 頁)。Fujimoto, T. The formation and transformation of a Kazakh village in the process of sedentarization: a case study in Central Asia. *The 2nd Conference on Cultural History of PaleoAsia*, Nagoya University Museum, February 12, 2017 (Proceedings, p.65).
- 山中由里子 (2017) 「想像界の生物相——マンティコーラにみる名付けと形象化」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020 : パレオアジア文化史学第 2 回研究大会』名古屋大学野依記念学術交流館、2017 年 2 月 12 日 (予稿集 62 頁)。Yamanaka, Y. The biota of the imaginary: Mantichora, its nomenclature and visualization. *The 2nd Conference on Cultural History of PaleoAsia*, Nagoya University Museum, February 12, 2017 (Proceedings, p.67).
- 卯田宗平 (2016) 「去勢なき家畜飼育のこれから——中国大興安嶺のエヴェンキ族らとトナカイ」、大学共同利用機関法人人間文化研究機構北東アジア地域研究国立民族学博物館拠点月例会、国立民族学博物館、2016 年 12 月 1 日。
- 卯田宗平 (2016) 「生業を裏打ちする文化を探る」、大学共同利用機関シンポジウム 2016『研究者に会いに行こう 大学共同利用機関博覧会』、大学共同利用機関主催、秋葉原 UDX (東京都千代田外神田)、2016 年 11 月 27 日。
- 大西秀之 (2016) 「モノに刻み込まれた帝政ロシアの植民地経営」『日本シベリア学会第 2 回研究大会』千葉大学、2016 年 11 月。
- 野林厚志 (2016) 「新人文化の形成：文化・行動変化の文化人類学的モデル」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020 : パレオアジア文化史学第 1 回研究大会』東京大学小柴ホール、2016 年 11 月 6 日 (予稿集 80 頁)。Nobayashi, A. The formation of modern human cultures: perspective of change of culture and human behaviour from cultural anthropology. *The 1st Conference on Cultural History of PaleoAsia*, University of Tokyo, November 6, 2017 (Proceedings, p.81).
- 池谷和信「狩猟採集民と隣人との相互関係について」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020 : パレオアジア文化史学第 1 回研究大会』東京大学小柴ホール、2016 年 11 月 6 日 (予稿集 82 頁)。Ikeya, K. Interaction between hunter-gatherers and their neighbors. *The 1st Conference on Cultural History of PaleoAsia*, University of Tokyo, November 6, 2017 (Proceedings, p.83).
- 山中由里子 (2016) 「想像界の生物相：生態系と人間の想像力の相関関係の比較文化的研究」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020 : パレオアジア文化史学第 1 回研究大会』東京大学小柴ホール、2016 年 11 月 6 日 (予稿集 84 頁)。Yamanaka, Y. The biota of the imaginary: a comparative study on interrelations between ecosystems and the human imagination. *The 1st Conference on Cultural History of PaleoAsia*, University of Tokyo, November 6, 2017 (Proceedings, p.81).
- 野林厚志・丸川雄三 (2016) 「生態資源獲得の道具と技巧の人類学的研究」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020 : パレオアジア文化史学第 1 回研究大会』東京大学小柴ホール、2016 年 11 月 6 日 (予稿集 86 頁)。Nobayashi, A. and Marukawa, Y. (2016) An anthropological analysis of tools and techniques for obtaining and processing ecological resources *The 1st Conference on Cultural History of PaleoAsia*, University of Tokyo, November 6, 2017 (Proceedings, p.87).
- 上羽陽子・金谷美和・中谷文美 (2016) 「南アジアにおける糸素材および織機の技術民族誌的研究」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020 : パレオアジア文化史学第 1 回研究大会』東京大学本郷キャンパス小柴ホール、2016 年 11 月 5-6 日 (予稿集 88 頁)。Ueba, Y., Kanetani, M. and Nakatani, A. (2016) An ethnographic analysis of technologies to produce yarn material and looms in South Asia. *The 1st Conference on Cultural History of PaleoAsia*, The University of Tokyo, Tokyo, November 5-6, 2016

- (Proceedings, p.89).
- 大西秀之 (2016) 「北東アジア地域における多文化集団の接触・交流状況：北海道開拓の開発と政策によるアイヌ社会聖地の創造」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第1回研究大会』東京大学小柴ホール、2016年11月6日（予稿集93頁）。Onishi, H. Contact and interaction between multicultural groups in the Northeast Asia. *The 1st Conference on Cultural History of PaleoAsia*, The University of Tokyo, Tokyo, November 5-6, 2016 (Proceedings, p.94).
- 藤本透子・吉田世津子 (2016) 「中央アジアにおける遊牧民の定住化——居住形態の変化を中心に」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第1回研究大会』東京大学小柴ホール、2016年11月6日（予稿集90頁）。Fujimoto, T. and Yoshida, S. Sedentarization of nomads in Central Asia: analyzing the change of dwelling. *The 1st Conference on Cultural History of PaleoAsia*, The University of Tokyo, Tokyo, November 5-6, 2016 (Proceedings, p.91).
- 菊田悠 (2016) 「ウズベキスタン、リシトン陶業現代史——ものと人間の関係モデルに関連付けるには」『（新学術領域研究）人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築』『パレオアジア文化史学 B01-B02 班合同会議』（代表：野林厚志）国立民族学博物館第4演習室、国立民族学博物館、2016年11月4日。
- 上羽陽子・金谷美和・中谷文美 (2016) 「南アジアにおける糸素材および織機の技術民族誌的研究」『（新学術領域研究）人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築』『パレオアジア文化史学 B01-B02 班合同会議』（代表：野林厚志）国立民族学博物館第4演習室、2016年10月31日。
- Fujimoto, T. (2016) Ancestral Land and Networking in the Course of Privatization after Socialism: A Case Study in Kazakhstan. In Session “Creating a Trans-Boundary Network and Shared Communication in the Changing Landscape of Asian Societies,” *East Asian Anthropological Association 2016 Meeting*, Sapporo, October 15, 2016.
- 卯田宗平 (2016) 「「反馴化」という働きかけ——中国と日本の鵜飼漁の事例から」、総合研究「自然観」（前近代を中心とした琵琶湖周辺地域における自然および自然観の通時的変遷に関する研究）研究会、滋賀県立琵琶湖博物館会議室、2016年9月3日。
- ONISHI, Hideyuki, (2016) Two Different Ancestors of the Ainu People: Roles of the Satsumon Culture and the Okhotsk Culture in Ainu History, *WAC (World Archaeological Congress)-8 Kyoto*, Doshisha University, Kyoto, Japan, September, 2016.
- ONISHI, H., (2016) Enforcement of Foraging Society on the Ainu, *WAC (World Archaeological Congress)-8 Kyoto*, Doshisha University, Kyoto, Japan, August, 2016.
- 上羽陽子 (2016) 「物質文化展示の新たな可能性について——国立民族学博物館南アジア展示場を事例に」『第58回 意匠学会大会』京都精華大学、2016年7月31日、ポスター発表。
- Yamanaka, Y. (2016) At the Crossroads of Global Cultural History: from a ‘Far Eastern’ Perspective. *International Comparative Literature Association 2016*, University of Vienna, Vienna, July 23, 2016.
- 卯田宗平 (2016) 「概念を規定し、事例を読みとく——鵜飼研究、中国から日本、そしてマケドニアへ」2016年度海外学術調査フォーラム・ワークショップ『フィールドサイエンスにおけるドキュメンテーション——あつめる・はかる・かぞえる』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（東京都・府中市）、2016年7月9日。

PaleoAsia Project Series 7

パレオアジア文化史学

—アジア新人文化形成プロセスの総合的研究—

Cultural History of PaleoAsia

発行日：2017年5月10日

編集：野林厚志（「パレオアジア文化史学」B01班研究代表者）

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1

国立民族学博物館 TEL. 06-6876-2151

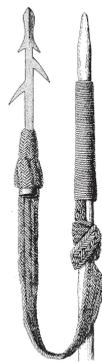
発行：文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016-2020年度
計画研究 B01班（研究課題番号 16H06411）

I S B N：978-4-909148-06-3

印刷・製本：株式会社遊文舎

〒532-0012 大阪市淀川区木川東4-17-31

TEL. 06-6304-9325



文部科学省科学研究費補助金
新学術領域研究（研究領域提案型）
2016–2020
パレオアジア文化史学

計画研究 B01 班 2016 年度 研究報告